FAIRY　TAIL～海龍の二つ名を持つ者～

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ～海龍の二つ名を持つ者～

【Ｎコード】
Ｎ１１１８Ｙ

【作者名】
原石

【あらすじ】
水の滅龍魔導士であるリョウマ＝ポセイジオはフェアリーテイルの面々に振り回されながらも自分の大切なものを守るために過ごしていく――――――――という大それた名目というハリボテを掲げて今日もリョウマはエルザの尻に轢かれてあっちこっちで大騒ぎをしていく……駄文ですがよろしくお願いします！

プロローグ（前書き）

リョウマが奏でるもう一つのフェアリーテイルの世界をご堪能ください！

一つ言っときますが主人公は転サトの主人公とは一切関係ありません。

プロローグ

リョウマ＝ポセイジオ

１８歳

容姿＆説明

青髪で微妙にツリ目。容姿はまともだが二枚目とは言われない。身長はエルザと同じぐらいだが、いつも腕一本でねじ伏せられている。

エルザの相棒。だがＳ級魔導士ではない。

七年前まで海龍シーサラーに育てられていたがシーサラーが突然姿を消し、孤独の身に。

そんな状態で途方に暮れていたリョウマをマスターマカロフが見つけてフェアリーテイルに入れた。

魔法名

水の滅龍魔導士

服装

基本的に青いパーカーを着ている。両手にはシーサラーがくれた青い指出しグローブを装着。

「うぉぉおおおおおおお！！」
――――――――――――――――――――――
今俺の目の前では赤く長い髪を持った鎧装着女が巨大な怪物を蹂躙している。
あ。今ので十体目だなー。

「はぁあああああああ！！」

十一体目十二体目十三体目ー……
今だから言うが俺の出番一切なし。
だって近くの岩場に腰かけて水飲める余裕があるぐらいだから。
彼女の名前はエルザ＝スカーレット。
フィオーレ王国最強の魔導士ギルド【フェアリーテイル】のＳ級魔導士だ。
エルザが所持している魔法の名前は【騎士＜ザ・ナイト＞】。まぁ、いわゆる騎士って奴だ。
エルザの魔法を分かりやすく説明すると早着替えできるお薦めアイテムってところ。
着替えの手間いらずだな。羨ましい。

「―――て、うおぉ！？」

俺がボーッと水を飲みながら考え事をしていたら突然顔のすぐ横を

デッカイ剣が通過していった。
今の剣は【黒羽の鎧】とセットになっている剣だな？
っつーことは……

「エルザさん！？　そんな危険なものを人に向けたら危ないっすよ！？」
「だったらお前も働け！　さっきから私ばかり戦ってるではないか！」
「そんなこと言ってもなー。エルザが強すぎて俺の出る幕全くないし」
「……【換装『海王の鎧』】」
「わー！待て待てエルザ！ストップ！その鎧は完全に俺を殺しにかかってる！」

【海王の鎧】というのは要するに水属性の魔法に対して最強を誇る鎧だ。
水属性の魔法を使う俺にとっては天敵そのもの。災害モンだ。
あ。俺、滅龍魔導士＜ドラゴンスレイヤー＞です。
あと、属性は『水』。要するに水の滅龍魔導士ってヤツだ。
巷ではカイリューのリョウマって呼ばれてる。
は？　ポケモン？　何それ？　どっかのモンスター？
コホン。話を戻すぜ。
んで、七年前に海龍シーサラーに捨てられた俺はフェアリーテイルの三代目マスターであるマカロフさんに拾われてフェアリーテイルの魔導士になったってワケ。
話の変え方が唐突すぎ？　それはアンタの慣れ次第ってことで。
っつーワケでそんなこんなの経験をして今の俺がある。
まぁ、フェアリーテイルには俺の他に一人だけ同じ滅龍魔導士がいる。
ソイツは火竜イグニールっていうドラゴンを見つけるのが今の目標

って言っていた。
と　いうわけで俺の目標も一応シーサラーを探すことってことで。
今まで育ててくれたお礼とか言ってないし。

「はぁ！とぉ！てりゃぁ！」
「エルザ敵は逆方向！俺は味方！　デューユーアンダスタン！？」
「言語道断！」
「どういう意味だぁ――――――――っ！？」

エルザの鋭い斬撃を最小限の動きで回避していく。
コイツとの付き合いは長いから剣の間合いと軌道ぐらい理解している。
気を抜きさえしなけりゃ当たることはねえ！

『グゥォッォオオオオオオオオオ！！！』

するとまだ死んでいなかったデッカイ角を持ったモンスターが俺とエルザに向かって突っ込んできた。
それに対して俺たちは――――――

「「邪魔を、するなぁぁぁあああああああああ！！！」」

ボコォ！

――――魔法を使わず拳だけで沈黙させた。

「ふぅ。クエスト完了だな」
「お前はほとんど何もしていないだろう。これは私の手柄だから報酬は九対一だ」
「ちょっと話し合おうかエルザ君」

俺とエルザのクエストはいつもこんな感じのやり取りで締めくくられる。
結局報酬は八割程度持って行かれた。
はぁ……金銭的に余裕がねえ……

ここはフェアリーテイルのギルド。
そこはいつものように喧騒に包まれていた。

「何か言ったかクソ炎！」
「超うぜぇよ変態野郎！」

普段から犬猿の仲で目があったら喧嘩ばかりしている炎の滅龍魔導士のナツ＝ドラグニルと氷の造形魔導士のグレイ＝フルバスターが今にも掴みかかりそうな雰囲気でメンチをきりあっている。

「た、大変だぁ――――――！！」

すると、ギルドの共同酒場に彼氏にしたい魔導士ランキング上位ランカーのロキが足をもつれさせながら転がり込んできた。
その整った顔の表面には大量の冷や汗が噴き出している。

「どうしたのロキ？」
「エルザが……エルザが帰ってきた！」
『な、なんだってぇ――――――――――！？』

フェアリーテイルの酒場にいる全魔導士が声をそろえて驚愕した。

一方その頃エルザ達はというと……

「重ぇ……」
「遅いぞリョウマ。早くしないと日が暮れる」
「人に荷物持たせておいて随分な物言いだなオイ」

先日クエストで討伐したモンスターの角を依頼主の街の人々が装飾してくれてエルザにプレゼントしたまでは良かった。
でも……そのもらい物を何で俺が運ばにゃあならんのだ……

「まったく……それでも水の滅龍魔導士か？」
「いやマジでそれ関係ないっす。だってこの角メチャクチャ重いんだから……」

ハッキリ言って腰痛い。
ギルドに戻ったらすぐに家に帰って惰眠をむさぼってやる。
よし決めた。今日は睡眠デーだ。思いっきり休ませてもらうとしよう。

「なぁエルザ。俺はギルドに着いたら家に帰って寝させてもら――――」
「あ。そうだリョウマ。仕事の成功の報告が終わったら闇ギルドの制圧に行くから準備をしておいてくれ」

ガン！ガン！

思わず地面を拳で殴る俺。
眼からは大量の涙が滝のように流れている。
俺は水系統の魔導士だから水分がいるんだよ。滅龍魔導士だし。
滅龍魔導士は自分の属性のものを食べることで魔力を一気に回復することができる。
ナツは炎系統だからいつも火ばっか食べてる。

俺は水系統だが食べるとすれば一番、海水が望ましい。
でもここは内陸なので海水なんか取れるわけがない。
戦いの最中に水を飲めるわけないし。
だから俺は考えた。
どこにいても水を取り込める方法を。
そして俺は思いついたんだ。
空気中の水分を吸収すればいいんじゃね？と。
というワケで二年前にようやく空気中の水分を体内に取り込む修行を終えました。
今では魔力の枯渇知らず。
いやーこれが努力の成果ってヤツだね。エルザには相変わらず勝てねえけど。

「また仕事！？　いい加減休ませてくれよ！ここんとこずっと働きっぱなしで寝不足なんだって！」
「それは私も同じだ。だがな、闇ギルドのせいで弱き市民たちがおびえて暮らしているこの世を正さなくてはならないのだ！」
「それは確かに正論だけれども！なんだろうこのやるせない気持ち！一体どこへぶつけたらいいんだろうか！？」
「【呪歌＜ララバイ＞】」
「はぁ？　何だよそれ？」

聞き覚えのない名前だな。

「私も詳しくは知らない。しかし昨日寄った酒場でアイゼンヴァルトの連中がその話をしていた」
「俺が必死に宿探ししてた時か……」

エルザの命令で一番高い宿を探し続けていた俺はもちろんその話は知らない。

だって足がパンパンになるぐらい走っていたから。

「しかし罪無き人に対して良い効果をもたらす魔法ではないことは確かだ」

「まぁ闇ギルドの連中が探すぐらいだからな」

お。やっと着いたみたいだなー。

俺の目の前には巨大な建造物がそびえ立っている。

これがフェアリーテイルのギルドだ。

俺がここに入った時から改装すらされていないボロギルド。

そろそろ耐えなおしでもしないのかねー。

「とりあえずナツとグレイに協力してもらう」

「……言うこと聞くのかアイツら」

「私に逆らえるような実力じゃないからな。フフフ……」

「エルザさん目がマジで怖いっす……」

出会った当初のエルザは今よりもっとまともだった気がする。

いや顔は今のが美人だよ？

そうじゃなくて俺が言ってるのは性格のこと。

俺と何回もクエストに行っているうちにどっかに頭でもぶつけたんだろうか？

随分と黒い性格になっちゃって……

「そういえばフィアはどうしたのだ？　今回のクエストにはついてきてないようなのだが……」

「ん？　ああ、アイツね」

フィアというのは六年前に山で拾った卵をドラゴンの卵と間違えて俺とエルザが孵化させた猫の名前だ。

……うん。今の表現に疑問を持つのは痛いほどわかる。俺とエルザだってしばらく呆然としてたから。
ナツも猫の相棒がいる。名前はハッピー。青毛の猫だ。因みにフィアの色は赤。ハッピーとフィアの魔法の名前は【翼＜エーラ＞】。その名の通り翼を生やして空を舞う魔法だ。その魔法のほとんどは俺とナツを運ぶために使用されている。

「アイツは多分だけど俺の家で眠ってるんじゃねーの？　基本的に面倒事が嫌いなタイプだしアイツは」
「そうか。それじゃあ闇ギルド討伐にフィアを連れて行くことにしよう」
「嫌全く俺の話から繋がる決定とは思えないしそもそもフィアの都合とか考えてないし特に俺の都合も！」
「いや、なのか……？」
「うっ」

俺と身長は同じぐらいのエルザが腰を落としてわざわざ上目づかいで俺を見てきた。ついでに言うと左目の端には涙が浮かんでいる。どうせニセの涙だろうけどなぁ……。エルザの右目は義眼だ。理由は知らない。エルザが教えてくれないからな。
俺は昔からエルザの涙が苦手だ。それは多分俺がエルザのことを好きだからだろうな。
好きな奴の涙は見たくない。そんなの常識だろ？

「いやじゃ、ない……」
「そうか！それはよかった！ならばともに正義の道を進もうではないか！」
「おー」

ほらやっぱりニセモノだった。

「うん。やはり持つべきものは相棒だな」
「そうですかー」
「では、早速入るとするか。我が家に」
「へーい」
俺とエルザはフェアリーテイルのギルドの中に入っていった。

プロローグ（後書き）

「もう、いや……」

By リョウマ

最強チームの結成（前書き）

「燃えてきたぞ！」

By　ナツ

最強チームの結成

「今戻った！マスターはおられるか！」

ざわざわ…

エルザがギルドの中に入った途端に酒場が騒然となった。
相変わらず恐れられてますねエルザさん。

「た…ただいま…」

ドンッ！！

エルザに遅れてギルドの中に入ってきた俺は酒場に着くなり背負っていたモンスターの角を床に置いた。
あー肩、痛ぇ。よくまわしとかないと。

「な、なぁリョウマ。そのデッカイの何だ？」

すると俺の傍に立っていたフェアリーテイルの仲間がそんなことを聞いてきた。
いやまぁ確かに気になるでしょーね。

「俺とエルザで討伐したモンスターの角だ。地元の人が綺麗に飾りを施してくれてなぁ。エルザが綺麗だからってここまで運んできたんだ。酒場に飾るらしいぞ？」
「マジかよ……」
「っていうかどんなサイズだよ……」

うん。俺だってその反応がしたかったさ。
自分が討伐したモンスターじゃなければな……

「それよりお前たち。また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても私は許さんぞ」
「いや少しは手加減してやれよ……？」

「な……なにこの人たち……」
「鎧を着ている方がエルザで全体的に青いのがリョウマ！！二人ともすっごく強いんだ！それにリョウマは水の滅龍魔導士なんだよ！」
「へぇ。ナツ以外にも滅龍魔導士がいたんだ……」
ん？　ハッピーと話してるのは誰だ？　見ない顔だな……新人か？

「カナ……なんという格好で飲んでいる」
「う…」
「ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸いがらが落ちているぞ」
エルザの言葉に踊りをやめるビジター。
ワカバにいたっては吸いがらを手で集めてゴミ箱に運んでいる始末。
確かにこりゃ酷いな……

「ナブ……相変わらず依頼板の前をウロウロしているのか？　仕事をしろ」
「エルザ、そこら辺にしといてやれって……」
ナブが心の底から悲しそうな顔をしてるからさ。

「まったく……世話が焼けるな。今日のところは何も言わずにおいてやろう」

「結構言ってますけどー？」
「あぁ？」
「ゴメンナサイ。すべてエルザさんが正しいです」
「一瞬で敗北しちゃった！？　あの２人ってチームじゃないの！？」
「それがチーム【ドラグーン】の実態です」

オイコラハッピー今すっごく聞き捨てならないセリフが聞こえたぞコラ。
するとエルザがハッピーの方を向いて数歩進んだ。
ん？　早速あの話をする気か？

「ところでナツとグレイはいるか？」
「あい」

今自分の相棒を裏切りやがったぞこの青猫。

「や……やあ、エルザ……オ…オレたち今日も仲良し…よく…や……やってるぜぃ」
「あい」
「ナツがハッピーみたいになった！？」

新人さんの言うとおり、ナツがハッピーの口癖を言うだけの人形になってしまっている。
そこまでエルザって怖いかね？

「そうか…親友なら時にはケンカもするだろう……しかし私はそうやって仲良くしているのを見るのが好きだぞ」
「あ……い、いや……いつも言ってるけど親友ってわけじゃ……」
「あい」
「こんなナツ見たことないわ！？」

俺は帰ってくるたび見てるけどな。
ハッピー状態のナツと無駄にかしこまったグレイの姿。
この二人のエルザ恐怖症は相当なもんだからな。

「そうか。ところで実は二人に頼みたい事がある。リョウマ」
「はいはい。今回の仕事先で少々やっかいな話を耳にしてしまったんだ。本来ならマスターの判断を仰ぐトコなんだが早期解決がのぞましいと俺とエルザは判断した」

「二人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな？　私とリョウマに」

ざわっ

エルザの言葉にその場が騒然となる。
そりゃそうだ。普段から俺と二人でしか仕事に行かないエルザがフェアリーテイル内でもトップクラスの力を持つナツとグレイに頼みごとをしたんだから。
まぁ、事情が事情だししょうがないか。

「出発は明日だ。準備をしておいてくれ」
「え…ちょ」
「エルザ！？」

ナツとグレイの言葉を全てシカトしながらエルザは住居であるフェアリーテイルの女子寮に戻っていった。
その場に残された俺たちはしばらく黙りこんでいた。
まぁ、状況がつかめなかったし。

「おいリョウマ！どんだけヤバい仕事なんだよ！？」
「なんで俺がこんな変態野郎と一緒に仕事に行かなきゃいけねえんだ！！」
「知るか！エルザの独断だ！」
「「独断！？」」
「エルザって独裁者？」
「あい。似たようなものです」
「クソッ。こんなヤツと一緒に組むってだけでも吐き気が出るのに……」
「んだとコラァ！？」
「やんのかクソ炎！」
「上等だクソ脱衣魔！」
「いい加減にしろ！！」

ゴィィン！！

あまりにナツとグレイの言い争いが面倒くさかったので魔力を少し込めたゲンコツで沈黙させる。
圧縮はしていないので二人の皮膚が切り刻まれることは無い。
水って圧縮するとなんでも斬れますからねー。

「んじゃ俺も帰るわ。また明日なー」

俺はそう言い残して自分の家に向かって歩いて行った。

「リョウマにエルザにナツにグレイ……これは最強チームになるかもね……」

ミラが何かつぶやいていたが俺の耳にはよく聞こえなかった。

―――――――――――――――

俺の家はギルドから歩いて数分のところにある。
見た目も中身も何の変哲もない一軒家。
位置的にはフェアリーテイルの女子寮の近くだ。
別に俺が望んでココに作ったわけじゃない。だってこの家はエルザからプレゼントされたものだから。
確か俺がフェアリーテイルに入ってちょうど一年たちましたよ記念かなんかだった気がする。
昔からアイツはサプライズ精神満点だったからなぁ。

がちゃ

「…………おかえり」

俺が家の中に入ると玄関に真っ赤な毛並みの猫が立っていた。
コイツが例の猫であるフィア。
俺とエルザが孵化させた猫だ。

「ただいま。ところでフィア、明日は暇か？」
「…………別に何も用事は入ってない」
「そりゃよかった（ニヤニヤ）」

「……なんだそのニヤケは……」

俺のにやけた顔を見て思わず二三歩後ろに後ずさるフィア。
そんなフィアを見て俺はさらに笑みを深くしてこう言った。

「明日はエルザと一緒に闇ギルドの討伐だ」

フィアはその場から逃走しようとしたが俺によってすぐにとらえられた。
道連れは多い方が良い。

っつーわけでやってきましたマグノリア駅。
今、俺の隣では荷物を全部俺に押し付けたエルザがフィアを抱いてもふもふしていた。
もちろん鎧は着ていない。フィアの毛の感触を味わえないからだ。

「久しぶりだなフィア！元気にしてたか？」

「……まあまあ」

「相変わらず愛想のない奴だがこの感触がたまらん！」
「……エルザ、苦しい」
今のフィアはエルザが思いっきり抱き寄せているのでエルザの豊満な胸に顔が埋まっている状態だ。
代わってくれないかな……うらやましい。
「エルザではなく【お母さん】と呼んでくれていいんだぞ？　お前は私とリョウマの息子だからな！」
「……随分と若い母親だな……」
「っ／／／／」
エルザのヤツどんだけ古い話題を引っ張り出してくるんだ……
今エルザが言ったことは俺とエルザがフィアを孵化させたばかりのころにエルザがふざけて言ったことだ。
何故か顔が真っ赤だったけど。
「エルザさーん？　そろそろいかないと乗り遅れちまうぞー？」
俺たちの目の前にはメンチをきりあっているナツとグレイと遠目でそれを見ているハッピーと例の新人さんがいる。
おそらく俺たちが来るのを待っているんだろう。
「それはそうなんだがこの感触をもう少しだけ味わっておきたい」
「味わってていいから列車に乗ろう。マジで乗り遅れるから」
「分かった」
やっと言うこと聞いてくれたよ……エルザの手綱はしっかり握っておかないといつ暴れだすか分かったもんじゃない。

「荷物多っ！？」

俺たちがみんなのところに行くと新人さんが俺が引いている滑車を見てそうツッコんだ。

ま、まともな新人だ……やっとあのギルドにも常識人が……！

「ん？　君は昨日妖精の尻尾＜フェアリーテイル＞にいたな……」

「！　新人のルーシィといいます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくおねがいします」

エルザの問いにルーシィはぺこりと頭を下げて自己紹介をした。

礼儀正しい。やっぱりまともな人間のようだ。何故か親近感がわく……

「私はエルザだ。こっちは私の相棒のリョウマ。そして今私が抱いているのが私たちの息子のフィア。いつもは私とリョウマとフィアでチーム【ドラグーン】を組んで仕事に行くんだが今回は事情が事情だ。よろしく頼んだぞ」

「どうも。水の滅龍魔導士のリョウマだ。フィアが息子っていう発言はスルーしてくれて構わない。コイツの戯言だから」

「戯言だと！？」

「……話が進まないから少し黙ってろ。オレはフィア。そこのハッピーと似たようなものだと思ってくれればいい」

「ということは背中から羽が生えたりするの？」

「フィアの【翼＜エーラ＞】は凄いんだよ！オイラよりも速く飛べるんだ！」

「……魔法はコツさえつかめればどこまでも上達する。ハッピーもそれさえ掴めればオレより早く飛べるさ」

「大人！！　この猫ちゃんすっごく大人ね！」

「……な、撫でるな……」

ルーシィに手を振り払ってエルザに抱き着くフィア。
いやマジで変わってくれませんかフィアさん。
そこのポジションに一度でいいから触れてみたいっす！

「なぁエルザ。今回の仕事について行く代わりに一つ条件を付けて良いか？」
「条件？　言ってみろ」

「この仕事が終わったらリョウマとエルザと決闘させろ。次こそは負けねえ。あの時とは違うんだ」
「！！！」
「お、オイ！はやまんなって！」

「だ　そうだ。俺は別に構わねえけどエルザは？」

久しぶりにナツと決闘したいとは思っていたからなー。
新技も試したいし。

「ふっ。いいだろう。本気で相手してやる。グレイはどうする？」
「（ブンブンブンブン！！）」

首が取れるんじゃなかろうかという錯覚を覚えさせるぐらい首を横に振るグレイ。
そんなに戦いたくないのか……まぁ、グレイは俺に相性悪いからな。

「よぉし！　燃えてきたぁ――――――――――！！やってやろうじゃねえか！！」

ナツが体中から炎を吹き出してマグノリア駅中に響き渡るぐらいの

大声で歓喜した。

最強チームの結成（後書き）

「べ、別に私はリョウマのことなどっ／／／」

By　エルザ

列車の中の出来事（前書き）

「……はぁ」

By フィア

列車の中の出来事

「もう列車なんか乗らねぇ……」

先ほどの威勢はどこにいったのか列車に乗った途端にナツがグロッキー状態になってしまった。

相変わらず乗り物には弱いようだな。

どうやったら乗り物酔いって治るんだろう？

「ナツうっとうしい。お前はもう列車に乗るな。走れ」

「いやそれは無理だから」

「ナツって相変わらず乗り物に弱いわよねー」

俺とエルザが仕事に行っている間にナツと何度も仕事に行っていたらしいルーシィがニヤニヤしてナツを見ながらそう言った。

あれ？　この子って意外とSっ気があります？

「しょうがない奴だな。私の隣に来い」

「あい……」

「どけってことかしら……」

何ィ！？　エルザがナツを自ら自分の隣に誘うだとォ！？

いや落ち着け俺。あのエルザのことだ。どうせナツを乗り物酔いの苦しみから解放するために――――

ぼこぉっ！

「ぐはぁ！？」

――――――意識を刈り取るだけだろうから。

「ん？　どうしたリョウマ。なんで私の顔をじっと見ているんだ？」
「その状態のナツを膝枕でもする気なんか？」
「ああ。ま、まさか……お前も膝枕がしてほしいのか！？／／／」
「違うわぼけぇ！子供じゃあるまいし！しかも顔を赤く染めるな！」
「（怒）」

一瞬

その言葉でしか表せないほど速く、エルザはボディブローで俺の意識を刈り取った。
な、なんで……？

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ルーシィ、ナツを頼んでもいいか？」
「は、はぁ……」

リョウマの鳩尾に文字通り鉄拳（篭手を着けているから）を食らわせて膝枕をすることに成功したエルザはこれまたいろんな意味でグ

ロッキー状態のナツをルーシィに渡す。
ルーシィは自分の隣に一人分の隙間が開いていたのでそこにナツを寝かせて膝枕をする。
その光景の一部始終を目の当たりにしていたグレイ、ハッピー、フィアは静かに心の中で合掌した。

「そういえば私ってナツ以外の魔法を見たことないなぁ。リョウマさんとエルザさんってどんな魔法を使うんですか？」
「エルザの魔法は凄いんだよ！相手の血がいっぱい出るんだ！」
「それはキレイというのかしら……」
「……ハッピー、それはキレイとは言わないぞ」
「別に私もリョウマも【さん】付けしなくてもいい。なんだか歯がゆいからな。リョウマの魔法はナツの水バージョンと思ってくれればいい。ナツとの違いと言ったら属性と攻撃の種類ぐらいだからな。コイツの滅龍魔法はナツのように殴るではなくてどちらかというと【斬る】だ」
「斬る？　水なのに？」
「ルーシィ、水を圧縮するとどうなるか分かるか？」
「えっと……水圧が上がるんじゃないかしら？」
「そう。リョウマの使う滅龍魔法は主にその性質を生かした魔法なんだ。まぁ、リョウマの場合は攻撃よりも防御の方が得意だがな。だからいつも私はコイツから守ってもらってばかりだ」
「防御？なんで？龍の迎撃用の魔法なんでしょ？」
「……リョウマは滅龍魔法によって水の圧力を限界まで上げることができるからほとんどの攻撃を防ぐことができる」
「リョウマの前では私の攻撃も歯が立たん。まったく…こいつは強いんだか弱いんだか……」

エルザがリョウマの髪を指で梳きながら微笑を浮かべて呟いた。
気絶させられたリョウマは何故か無邪気な寝顔を浮かべている。

連続の仕事続きで疲労しているようだ。

「へぇ。で、エルザはどんな魔法を使うの？」

「私の魔法は見ても全く面白くないぞ。それより私はグレイの魔法が一番きれいだと思うがな」

「グレイの？」

「そんな大層なもんじゃねえよ」

そう言ってグレイは自分の前の両手を出して左手の甲を下に向け、その上に握った状態の右手を置く。

すると、グレイの右手と左手の間から冷気のようなものが漏れ出した。

そして――――――

「まぁざっとこんなモンだろ」

――――グレイが右手をどかすと左手の上にフェアリーテイルの紋章の氷像が鎮座していた。

そう。グレイは氷の造形魔導士なのだ。

「うわぁ！すごーい！っていうか氷って……似合わないわね。ぷぷぅ」

「ほっとけ」

「ん？　ちょっと待ってよ……ナツとグレイ……火と氷……ああ！だからあんたたちって仲が悪いのね。子供みたいでかわいー」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろそんな事ァ！」

図星を突かれたグレイは顔を赤く染めて窓の外に視線をやった。

そしてこの後ルーシィがエルザにとんでもないことを言い出す。

「あ、そうだ。ねぇエルザ。昨日から気になってたんだけどリョウマとエルザって付き合ってるの？」
「ッ！？／／／／　ごほっ！けほっ！」

ルーシィの何気ない質問に飲んでいたコーラをのどに詰まらせるエルザ。
喉と胸を抑えて悶えている。
しかし、エルザの顔が赤いのは呼吸困難のせいではないだろう。

「きゅ、急に何を言い出すんだ！」
「だってリョウマとエルザって昔からチーム組んでるんでしょ？
ねぇどこまで進んでるの？　A？B？もしかしてC？」
「すまないルーシィそのアルファベットは一体どんな意味なんだ？」
「あー……知らないパターンね。じゃあ言い方を変えるわ。リョウマとエルザってキスしたことある？」
「「「（ば、バカルーシィ！その話題はエルザに振っちゃだめだ！！）」」」

先ほどから黙り込んでいた一人と二匹が顔を青ざめさせて、同時に心の中でルーシィに訴えかけていることなど知る由もないルーシィはエルザの回答をニコニコと笑顔で待っていた。

「き、ききききききキス！？　べ、別にしたこともないではないがしてしまったこともあったりなかったり……／／／／」
「どっちなのよ」
「っ！／／／／（かぁ～っ）」
「……エルザとリョウマは今年のエルザの誕生日の日にキスしてた」
「「フィア！？」」

「な、ななななななななな」
「グレイ隊長！エルザが壊れました！」
「お、俺に振るな！と、とりあえずほっとけ！」

フィアのしれっと暴露に耳の先まで真っ赤に染めたエルザは意味不明な言葉を発しながら混乱してしまった。
その周りではフィアの予想外の行動にテンションがおかしくなっているグレイとハッピーを苦笑いで見ているルーシィがいる。

「へぇ……（ニヤッ）　ねぇフィア？　二人はどういう流れでキスしたのぉ？」
「……エルザが『誕生日のプレゼントはリョウマのキスが欲しい』と言ったのでリョウマが顔を真っ赤に染めぐっ！？――――――――（くたっ）」

更にエルザの黒歴史を暴露しようとしいたフィアの首元に手刀を決めて気絶させたエルザはハッピーに向かってその亡骸を放った。

「まったく……フィアの冗談にも困ったものだな。つい調子に乗ってあることないこと言ってしまう」
「……ホントはそれ以上まで行こうとしてたくせによく言うぜ……」
「あぁ！？」
「はいスイマセン僕が悪かったです生きててごめんなさい」
「瞬殺ね！？」

ぼそっと文句を言ったグレイはエルザの一睨みでその場に土下座を決める。
フェアリーテイルにはこうした上限関係が構築されているのだ。

「そ、それより本題に入らない？」
「賛成だな。つーかエルザ、今回は一体何事だ？　お前みたいなバケモンが人の手を借りたいだなんて　よほどだぜ」
「そうだな……話しておこう。つい先日のことだ。私がリョウマの宿探しを待っている間の話なのだが――――」

そしてエルザは酒場であった話をルーシィ達に話した。
その話を聞き終わったルーシィとグレイは話に出てきたひとつの単語に疑問符を浮かべる。

「ララバイ？」
「子守唄……眠りの魔法か何かかしら？」
「分からない……しかし封印されていると聞くとかなり強力な魔法だと思われる」
「話が見えてこねえなァ。……得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてるやつらがいる……ただそれだけだ。仕事かもしれねえし何て事ァねぇ」

確かに今の話だけを聞いた限りだとグレイの言うとおり気にするようなことじゃないだろう。
ただのちんけな闇ギルドが封印されている強力な魔法を解こうと必死になっているだけだ。
しかしこの後のエルザの言葉を聞いてその余裕は一瞬で吹き飛ぶこととなる。

「そうだ。私も初めは特に気にかけていなかった……エリゴールという名前を思い出すまではな」

ボォー
カンカンカン

エルザの言葉に続く形で列車が走る音がその席に響いていた。
それはその席が静寂で包まれているということを表していた。

「魔導士ギルド【鉄の森＜アイゼンヴァルト＞】のエース　死神エリゴール」
「し…死神！？」
「暗殺系の仕事ばかりを優先して受け続けた結果ついた字だ。本来、暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが鉄の森は金を選んだ」

列車から降りながら巨大な滑車を引いたエルザはルーシィ達に話を続ける。

「結果…6年目に魔導士ギルド連盟を追放……現在は闇ギルドというカテゴリーに分類されている」
「や、闇ギルドぉ！？」
「ルーシィ、汗いっぱい出てるよ？」
「汗よ！！」

エルザ達が帰ってくる前に闇ギルドのことをミラジェーンから聞いていたルーシィは体中から冷や汗を出して恐怖する。

「なるほどねぇ……」
「ちょっと待って！追放って…処罰はされなかったの！？」

確かに暗殺の依頼ばかり請け負っていたという罪があるなら処分程度の罰ですむはずがない。

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕され　ギルドは解散命

令を出された。しかし、闇ギルドと呼ばれるギルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドのことなのさ」
「……帰ろっかな……」
「出た」

駅の出口に向かって歩き出そうとするルーシィにハッピーが鋭いツッコミを入れる。
フィアは何故か考え込んだような表情でそこに浮かんでいる。
「不覚だった…あの時エリゴールの名前を思い出していれば……
……全員血祭りにしてやったものを……」
「ひぃぃっ！？」

怒りに満ちたエルザから放たれる黒いオーラに鳥肌を浮かべて恐怖するルーシィ。
今のエルザの背後には間違いなく修羅が降臨しているだろう。

「だな……その場にいた連中だけならエルザだけで十分だったかもしれねえ。少し待てばリョウマも加勢に来るだろうからな。だがギルド一つ相手ともなると……」

グレイの現実的な一言に小さく頷くエルザ。
エルザだって自分の実力ぐらい理解している。
たった一人で一つのギルドを潰すという子尾が難しいことぐらい分かっているのだろう。
まぁ、無理ではなくて困難と思っている辺りがエルザがいかに強いかを物語っているのだが……

「奴らはララバイなる魔法を入手し何かを企んでいる。私とリョウマはこの事実を看過する事は出来ないと判断した……鉄の森に

乗り込むぞ」
絶対に悪を許さないエルザが真っ直ぐな瞳でグレイたちを見つめた。
そしてグレイはその言葉に頷く。

「面白そうだな」
「来るんじゃなかった」
「汁出すぎだって」
「汁って言うな」

駅のホームを出たエルザ達はひとまず荷物を置くために宿を求めて街を歩くことにした。
そして街の住宅街に着いた時にとある一つの問題が浮上することとなる。

「で……鉄の森の場所は知ってるのか？」
「それをこの街で調べるんだ」
「……なぁ」
「え！？　ちょっと嘘でしょ！？」
「「ナツとリョウマがいないんだが（いないんだけど！？）」」
「「……えぇ！？」」

――――――――――――――――――――

ガタンゴトン……

「ぐぅ………」

「はぁ……はぁ……」

列車に取り残された乗り物酔い状態で苦しむナツと熟睡しているリョウマはひたすら列車に揺られていた。

「お兄さん　ここ空いてる？」

すると黒い髪を後ろでくくった青年がその向かい側の席に腰を下ろした。

「あらら……辛そうだね　大丈夫？」

「ぐぅ……」

「ふぅ――――はぁ――――」

これだけを見ればかなり親切な優しい青年だろう。

だがしかし――――

「妖精の尻尾＜フェアリーテイル＞………正規ギルドかぁ」

青年は苦しんでいるナツと眠っているリョウマを交互に見詰めてニタリと笑った。

「うらやましいなぁ……」

この青年の名前はカゲヤマ。
闇ギルドの鉄の森に所属している魔導士だ。

列車の中の出来事（後書き）

「「妖精＜ハエ＞パンチ」」

By　リョウマ&ナツ

＜ララバイ＞の正体（前書き）

「水の滅龍魔法は防御系が多いんです」

By　リョウマ

<ララバイ>の正体

「正規ギルドは可愛い子が多いんだねぇ……少しぐらい分けてよ」
異なる意味でダウンしているナツとリョウマをニヤニヤしながら見ているカゲヤマ。
その笑みの中には憎悪と妬みが混在している。
「……シカト？　それは闇ギルド差別だよ。妖精の尻尾って何て呼ばれてるか知ってる？　ハエだよ、ハエ」
するとカゲヤマは座席から立ち上がって少し助走をつける。
そしてダウンしている二人に向かって――――――
「ハエキ――――ック&ハエたたき――――――！」
座ってグロッキー状態のナツの顔面に飛び蹴りを決めて寝ているリョウマの顔面にパンチを叩き込んだ。
もちろん意識が薄いナツと意識が無いリョウマが避けられるはずもない。
「……あぁ？　誰だてめぇ……」
「痛っ！？」
「やっと返事してくれたよ。ったく、これだから正規ギルドの魔導士はイラつくんだよね。自分たちが絶対の正義とか勘違いしちゃってさぁ。バカじゃねえの？ヒャハハ！」
下卑た笑いを表に出しながらナツとリョウマを上から見下す。

この青年は二人が反撃できないと思っているようだ。

「………【海龍の鉄拳】！」

「うごぉ！？」

そして眠りから覚めたフェアリーテイル最強のチームの滅龍魔導士がカゲヤマを吹っ飛ばす。

「誰だテメェ？」

――――――――――――――――――――

なんか目ぇ覚める前に顔面殴られた。

全く意味が分かんねえし状況がつかめねえ。

とりあえず目の前のウゼェちょんまげっぽい髪型の野郎をぶっ飛ばしておきました！

「て、テメェ！鉄の森＜アイゼンヴァルト＞に手を出してタダで済むと思ってんのか！？」

「あぁ？　眠ってる人の顔面を攻撃するぐらいしかできねえ弱虫野

郎が集ってるギルドなんか怖くもねえよ。それに鉄の森？　闇ギルドじゃねえか。ん？　そういえばエルザが探してたギルドも鉄の森だったような……」
「な、なにをブツブツ言ってんだ！」
そうだよ。エルザが潰すって言ってたギルドも鉄の森だったじゃんか。
いやー運がいいね。こんなところでターゲットに遭遇ってか？
日ごろの行いが良いからかねー
「いやー今日のお前は運が良いぜ。なんてったって俺の滅龍魔法を全部受けることができるんだからな」
「め、滅龍魔法！？」
「ん？　闇ギルドだから知らねえか？　じゃあ教えてやるよ。俺はリョウマ＝ポセイジオ。妖精の尻尾の水の滅龍魔導士だ」
「ま、まさかお前が海龍＜リヴァイアサン＞！？」
なんか俺の二つ名がパワーアップしてますねハイ。
まぁ、噂という物には尾ひれがつくものだからなぁ。
「――――ん？　なんだその妙に禍々しい笛？」
ウザ男の足元に何か髑髏のような形の木の笛が転がっている。
うーん……どっかで見たような……ってうおぉ！？
キキ――――――――ッ！
「なっ！？　急停車か！？」
「とまった……？」
「ん？　お目覚めかナツ。とりあえず一緒にこのウザ男殴んねえ？」

「了解　（ニヤッ）」
「「せーの……」
俺とナツは右手に魔力を込めてウザ男の顔面めがけて――――――
「【海龍の鉄拳】！」
「【火竜の鉄拳】！」
――――――パンチを叩き込んだ。
「げぼぉ！？」
おおー……壁に激突した……弁償とかしないでいいよな……？
『先ほどの急停車は誤報だということが発覚しました。これより再発車します』
「やべぇ！？　逃げよう！」
「え？　ちょ、マジィ！？」
ナツが光速で荷物を纏めて俺の首根っこ掴んで列車から飛び降りた。
この速さで落ちますか貴方は！
「ってなんでお前ら列車から飛び降りてくるんだよ！？」
あ。グレイが魔導四輪の上に載ってる。
ああー……これはぶつかるな。
ナツが
ゴィーン！

「「うぎゃあ――――――!?」」
「よっと。うわぁ、いたそー」
流石にこの速さで頭を打つのは重傷だと思うので水のクッションで無事に地面に着地。
こういう時って水は便利です。
「無事だったかリョウマ！」
「ん？　この魔導四輪を運転してたのってエルザだったん？」
運転席の方から降りてきたから間違いなくそうなのだろうけど。
「っ……」
「おっと。ったく、魔力の使い過ぎだバカ」
魔導四輪は運転手の魔力を消費して走行する乗り物だ。
もちろん走行速度と距離に消費魔力は比例する。
いくら強大な魔力を持っているエルザでも辛いものは辛いだろう。
「それにしてもあのちょんまげ野郎後で覚えてろよ……皮膚を一枚一枚削ってやる。クケケ……」
「リョウマって意外とSなのね……」
「あい」
人の顔面にパンチを叩き込みやがったからな。
この恨みは忘れん。
「ん？　リョウマ、そのケガは何だ？」
「これか？　これはさっき列車の中でアイゼンヴァルトの魔導士に

寝てるときに顔面殴られたんだよ」
「アイゼンヴァルトだと！？　この、バカモノォ――――――――！！」
「げぼらぁ！？」

何故か顔面にビンタ喰らった。
メチャクチャ理不尽だっての。

「な、なにすんだ！？」
「アイゼンヴァルトが今回の私たちの目的だと説明したはずだ！何故取り逃がした！」
「ナツが俺の首根っこ掴んで列車からダイブ決めたからだ！」
「（ぐるん！）」
「ご、ごめんなさい……」

エルザが怒る修羅のような形相で睨んだとたんにナツがしゅんとして謝罪した。
相変わらずこの上下関係は凄いな。
エルザに刃向かえるのってラクサス以外にいるのかねぇ？

「そういえばあの魔導士変なもの持ってたぜ？」
「変なもの？」
「ああ。なんか髑髏みたいな木の笛持ってた。三つ目だったかなぁ……」

すげぇ禍々しかったから印象に残ってる。
しかも魔力が込められてた。
あれは相当ヤバいもんかもしれない。

「三つ目……髑髏……」
「どしたのルーシィ？」

「…あ！それがララバイだ！呪歌<ララバイ>死の魔法！」
「死の魔法？」
「あたしも本でしか見たことが無いんだけど、禁止されてる魔法の一つに呪殺ってあるでしょ？」
「ああ……その名の通り対象者を呪い【死】を与える黒魔法だ」
「呪歌<ララバイ>はもっと恐ろしいの」

怖ろしい？いや確かに呪殺は怖ぇけどそれがなんでララバイに関係してんだ？
ララバイが笛ってんならもっと別の使い方がありそうだが……
……ん？
待て。今何が引っ掛かった？
考えろ……
笛……呪殺……呪歌……広範囲……！

「お、おいルーシィ。ま、まさかララバイって……」
「気づいたのね。そう、ララバイは集団呪殺魔法。その笛の音を聞いたものに等しく【死】を与える最悪で最凶の魔法具なの」

そんなもの使って鉄の森（あいつら）は一体何をしようとしてるんだ……？
まぁ、とりあえずはあの魔導士を追った方が良いかもしれない。

「行こうぜ。この先の駅に鉄の森がいるはずだ。誰かが殺される前に止めねえと」
妖精の尻尾（おれら）は絶対的な悪を絶対に許さねえ。

＜ララバイ＞の正体（後書き）

「火の滅龍魔法は攻撃ほとんどだ！」

By　ナツ

鉄の森<アイゼンヴァルト>（前書き）

「え――――――っ！！？　あたし！！？」

By　ルーシィ

鉄の森＜アイゼンヴァルト＞

「集団呪殺魔法だと！？　そんなものを使われたら多くの死者が出る！急がねば！」

エルザがまた無理して魔導四輪をかっ飛ばしてます。
もちろん乗り物に弱いナツは再びグロッキー状態。
なんかハッピーはルーシィに魚とかいろいろ言ってるし。
グレイは魔導四輪の天井に張り付いてます。
え？　何故かって？　座席が空いてないからさ。

「おーい、大丈夫かグレイー？」
「大丈夫なわけねえだろ！？　気ぃ抜いたらいつでも落ちるぞこの体制！！」
「んー？　風圧のせいでよく聞こえん。何て？」
「テメェの顔面を氷漬けにしてやろうか……？」
「エルザ、もっと速度アップ」
「分かった！どこかにしがみついておいてくれ！」
「だってさグレイ。頑張れ」
「テメェマジで覚えとけよあばばばばばばばば！！！！」

上の方まで見えないからどうなってるかはよく分からないけど、多分風圧のせいで顔が大変なことになってるんだろう。
良かった……実力で座席奪っておいて。

「見えた！オシバナ駅よ！」
「なんか煙出てるな」
「鉄の森＜アイゼンヴァルト＞！既に行動を開始していたとは！！」

さてどうする？　いちいち魔導四輪から降りていたら間に合わないかもしれない。
どうすればあいつらが笛を吹く前にたどり着ける？
速く……速く……あ。

「良いこと思いついたぁ（ニヤリ）」
「あ、あの……リョウマ？　な、何を思いついたのかなー？」
「エルザ！今から魔導四輪にバリアを張る！このまま駅の中に突っ込め！！」
「分かった！」
「ウソォ！？」
「多分嘘じゃないです。なんてったってチーム【ドラグーン】の二人だからね」

さて、俺も魔法の方に集中するかな。

「何物も通さぬ水の結界よ！【流水盾＜シールド＞】！！」

魔導四輪の前に透き通った水の盾が構成された。
この魔法の強度はエルザの攻撃数回程度なら防ぐことができるぐらい強固だ。

「え？　リョウマって滅龍魔法以外も使えるの？」
「あい。リョウマは滅龍魔法以外に水の魔法も使えます」
「まぁ、こっちはサブみたいなもんだからあまり強くないけどな。いつもは滅龍魔法の方で防御してるし」

シーサラーはあまり攻撃の魔法とか教えてくれなかったからなぁ。
『防御こそが最強の攻撃！』とか言ってたし。
それって要するにカウンターってことだろ。

ドコォォン！！！

そんなこんなでオシバナ駅の中へ強硬侵入。
慰謝料の方は評議院の方へお願いします。
っていうか鉄の森の連中が勢揃いしてますね。
何とか間に合ったみたいだ。

「やはり来たか、妖精の尻尾（フェアリーテイル）」

鉄の森（アイゼンヴァルト）の連中のちょうど真ん中にやけに変態的な格好をした白髪の魔導士がいた。
キモイ……っていうかあの格好と態度が似合いすぎだ。
なんかデカい大鎌もってるし。

「貴様がエリゴールだな。呪歌（ララバイ）を使って何をするつもりだ」
「何を？　ヒャハハッ！俺たちは暇だからよぉ。殺すのさ！等しく死を与える！」

ララバイをお手玉のように投げるエリゴール。
さっきから視線がスピーカーの方にいってるような……
そういうことか。

「気を付けろエルザ。アイツはおそらくこの駅のスピーカーでアレを流す気だ」
「なっ！？」
「オイオイ何だよ先にネタ晴らしってか？　つまんねえなオイ。俺の大量虐殺（あそび）の邪魔してぇのかぁ？」
「遊びだと！？　貴様……人の命を何だと思ってる！」

殺人を何よりも嫌うエルザが激昂している。
こんなエルザを見るのは久しぶりだ。

「まぁまぁ落ち着けって。お前ももうすぐ俺の遊びの犠牲者になるんだからよぉ」
「貴様ぁ……」
「アンタら最低よ！そんなんだから闇ギルドなんていうクズみたいなところまで落ちるのよ！」
「あぁ？　ウゼェよお前。おい、カゲヤマ」
「残念だったな妖精（ハエ）ども！　俺たちが奏でる死の悲鳴（メロディ）を聞くことなく死んじまうんだからなぁ！！」
「なっ！？」
「しまった！」
「ルーシィ！」

カゲヤマの足元から影がのびてルーシィに襲い掛かった。
クソ！ここからじゃ間に合わねえ！！

「きゃあ！？」

「やっぱりお前かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ザシュッ

グッドタイミングで目覚めてくれたな。ナツ。
っていうか影って魔法で断ち切れたりするんだな。
俺も今度試すか……

「なっ……テメェ……」

自分の魔法を止められたカゲヤマがかなり悔しそうに顔を歪める。
そんなに自信があったのか？
俺たち相手に。

「今度は地上戦だな！燃えてきたぞ！」

元気を取り戻したナツが鉄の森の連中を睨みつける。
しかし向こうも負けじと睨み返す。
これってなんだか不良同士のけんかみたいだな。

「……ふぅ。後は任せたぞ。俺は笛を吹きに行く」
「！？」
「妖精（ハエ）どもに鉄（おれたち）の森の力を思い知らせてやれ」

ガシャァァン！！

なっ……逃げやがっただと！？
卑怯なヤツ！！

「外に出たか！」
「向こうのブロックだな……」

さてどうしよう。
ココには大量の鉄の森たち。
しかしエリゴールを追わないとたくさんの死者が出てしまう。
まぁ、とりあえずはエルザが指示出すだろ。

「ナツとグレイはエリゴールを追え！」
「「む」」

いやそこで嫌そうな顔すんなよ。

「お前たち二人が力を合わせればエリゴールにだって負けるハズがない」

「「むむ……」」

「ここは私とリョウマとルーシィで何とかする」

「え？　私も数に入ってるの！？」

「オイラは戦力外ってこと……？」

「……まぁ、俺たちは飛ぶしかできないから」

あ。そういえばフィアもいたな。

あんまり喋らねえから忘れてた。

「エリゴールは呪歌をこの駅で使うつもりだ。それだけは何とか阻止せねばならない」

いやー見事なシカトっぷりですねお二人さん。

人の話はよく聞きましょう。

「聞いているのかっ！！！」

「「も……もちろん！！」」

「行け！！」

「「あいさー！！！！」」

お。ナツとグレイを追って向こうから二人の魔導士が追撃に向かったな。

さて、と……

「エルザ、本気で行ってもいいのか？」

「当たり前だ。こんな奴らに手加減なんて不要。フィア、ルーシィ

とハッピーを安全なところに連れて行ってくれ。じゃないと……安全は保障できない」
「……了解」

「たった二人で何ができるってんだ！！」
「こっちはこんなに数がいるんだぜ？」
「やっちまえ！！こんな妖精（ハエ）ども敵じゃねえ！！」

あーあーぎゃーぎゃー言って正面からの攻撃か。
なんて単純な攻撃だ。
見るのも喰らうのもバカらしい。

「俺から行くぞエルザ」
「分かった。【換装『天輪の鎧』】」

「鎧の換装！？」
「……エルザは武器だけではなく鎧も換装することが可能」
「しかもそれだけじゃないよ！」

天輪の鎧か……ということは一気に葬り去る気だな？

「換装できる魔導士ぐらいこっちにもたくさんいらぁ！」

魔法剣を携えた鉄の森の連中がこっちに突っ込んできた。
数は……２０か。
それなら……

「俺を無視してんじゃねえよ。すぅ～……【海龍の咆哮】！！！！！」

ゴガシャァァァアアア！！！

俺が放った水のブレスで突っ込んできていた鉄の森が一掃される。
まだまだ向こうの数はいる！！休まずに行くぞ！！

「どうだエルザ？　この前よりはパワーアップしたと思うんだけど」
「流石だなリョウマ。私も負けてられん。舞え、剣たちよ」

エルザの命令で数えきれないぐらいの数の剣が宙に浮かぶ。
あ。やべぇ。防御しねえと。

「エルザ……！？　まさかコイツ……」
「【循環の剣＜サークルソード＞】」

まさに一掃。
円を描くように回転した剣が鉄の森＜アイゼンヴァルト＞を次々に排除していく。
っていうかあの剣って結局何本あるんだろう？
今度聞いてみるか。

「やろぉ！俺様が相手じゃあ！！」
「ま…間違いねえっ！！コイツぁ、妖精の尻尾（フェアリーテイル）最強の女……妖精女王（ティターニア）のエルザだ！！！！！！！」

妖精女王（ティターニア）
いつからかは忘れたがエルザが世間で言われるようになった二つ名だ。
縦横無尽なその華麗な動きはまさに妖精のよう。
そんな感じだった気がする。

「すごぉ――――――い！！」
「「ふぅ……」」
「ひ、ひぃ！」
あ。なんか生き残りが逃げた！
「エリゴールのところに向かうかもしれん。ルーシィ、追うんだ！」
「え――――――っ！！？あたしが！？」
「頼む！！（ギロッ）」
「はいいっ！！」
エルザの剣幕に負けたルーシィがハッピーと何故かフィアを掴んでさっきの魔導士を追って行った。
頑張れ新人。
「っ……（よろっ）」
「よっと……やっぱり魔力の使い過ぎだ。相変わらず無茶しやがって」
「リョウマ……速く外にいる街の人たちに知らせないと……」
「そうだな。んじゃ……ほいっと」
「なっ！？／／／」
急ぐ必要があるのでエルザを抱き上げる。
この持ち方は俗にいうお姫様抱っこなるモノなんだがやっぱり持ちやすいなこれ。
初めてしてみたけど便利です。
「な、何故この持ち方をする！？／／／」
「なんでってこの持ち方が一番速く移動できるからだ」

「ま、まだお前には早い！／／／」
「うっさい。いいから行くぞ」
「ちょ……うぅ……あ、ありがとぅ……／／／」
耳の先まで真っ赤に染めたエルザが尻すぼみな声でそう言った。
まぁ、今の彼女は魔力が尽きかけていていつ倒れるか分かったもんじゃない。
だから俺が支えるんだ。
チーム【ドラグーン】には一つの掟があるってことを知ってるか？
別に何も難しくはない。
誰だってできる簡単な掟だ。
「さて、今度の休みに一緒に買い物にでも行ってやる。それで許してくれるか？」
「……ぅん／／／」
俺とエルザのどちらかが動けなくなった時でも守れる掟。
俺たちはこの掟を守ることでこれまで一緒にチームとしてやってきた。
その掟は――――――――――
「よし！出口だ！エルザ、言うことは決まってるのか？」
「当たり前だ。彼らをここから逃がす。ただそれだけのことだ」
「そう、だな！」
――――――――――大事なパートナーの支えになること
それがチーム【ドラグーン】の掟だ。

鉄の森<アイゼンヴァルト>（後書き）

「……最大出力（マックスブースト）」

By フィア

妖精たちは風の中（前書き）

「お久しぶりです」

By　リョウマ

妖精たちは風の中

「命が惜しい者は今すぐこの場を離れよ！！！！駅は邪悪なる魔導士どもに占拠されている！！そしてその魔導士はここにいる人間すべてを殺すだけの魔法を放とうとしている！！！！できるだけ遠くへ避難するんだ！！！！」

駅員から奪った拡声器片手にエルザが集まっていた街の人々に避難を促す。

よし。避難を始めたな。

これで被害は少なくなる。

「ちょ、ちょっと！？　なんでそんな混乱を招くようなことを！？」

「お前らも逃げた方が良いぞ。エルザが言ってることはホントのことだから」

「ひ、ひぃ！！」

駅員も避難完了。

これでこの駅にいるのは妖精（おれたち）の尻尾と鉄（あいつら）の森だけだ。

あとはエリゴールを探すだけ……って！？

「な、なんだよこれ……！？」

「風の結界……！？」

何故か駅の周りに竜巻のような風が渦巻いている。

なんだこれ……誰の魔法だ？

「んぁ？　なんで外に妖精（ハエ）が二匹……？」

「「エリゴール！？」」

上空からの憎たらしい声。
目を上げてみるとそこにはララバイを持ったエリゴールがふわふわと浮いていた。
なんでコイツは駅の外にいるんだ？
目的は街の人々の抹殺じゃなかったのか！？

「中にいろ。妖精（ハエ）ども」
「なっ……」
「エルザッ！！！」

エリゴールに蹴り飛ばされたエルザの方を掴んで一緒に結界の中に入れられた。
クソッ！こんな結界！

「痛ぅ……」
「りょ、リョウマ！？大丈夫か！？」
「大丈夫。ただのかすり傷だ」

なんだこれ？
入った時は何もなかったのに出ようとすると風が皮膚を切り裂きにかかるなんて……

「やめておけ。この魔風壁は外からの一方通行だ。中から出ようとすれば風が体を切り刻む」
「これは一体何のマネだ！！？」
「鳥籠ならぬ妖精籠（ハエかご）ってところか。……にしてちとデケェがな。ははっ」
「エリゴール……」
「おお怖いねえ。相棒が傷ついた途端にこれかよ。チッ。てめぇら

のせいで時間を食っちまった。あばよ。俺はココでおさらばさせてもらうぜ」
「なっ！？」

エリゴールが街の外へ飛んで行った。
なんで街を出る必要がある……？
アイツの標的はここじゃねえのか……？

ドゴォォオオオン！！！

「！？」
「エルザ！それにリョウマも！」
「グレイか……」

壁を蹴破って出てきたのはグレイだった。
エリゴールを追ってたんじゃなかったのか？
いや、そのエリゴールはもう逃げたけど。

「って何だその傷！？」
「気にすんな。ただのかすり傷。それより何かそいつから聞き出したか？」

グレイの背後に転がっている魔導士を見て俺は言う。
アイツは鉄の森の魔導士だ。
さっきグレイを追っていた二人の魔導士のうちの一人だからな。

「ああ！鉄の森の本当の標的はマスター達（じーさんたち）だ！この先の街で呪歌（ララバイ）を吹く気だぜ！！」
「くそっ。この魔風壁さえとければな……」

このままじゃエリゴールを追うどころか外にすら出れねえ。
マスターたちが危ないってのに……

「……待て。そういえば鉄の森にカゲヤマという魔導士がいるはずだ！！奴は一人で呪歌（ラプバイ）の封印を解いた！！奴ならこの魔風壁だって解けるはず！！」
「解除魔導士（ディスペラー）か！？」
「カゲヤマ……？　ああ、あのちょんまげ野郎か」
「知っているのかリョウマ！？」
「ああ。どうせ今頃ナツとでも戦ってるんじゃねえか……？」
「分かった！！探すぞ！！」

とりあえず俺たちはカゲヤマを探すことにした。
急がねえと時間が無い！！

「なっ……」
「か、カゲヤマ！？」

目の前でカゲヤマが背中を刺された。
あの後すぐにカゲヤマを見つけた俺たちは魔風壁の解除をしろとカゲヤマを脅した。
それにカゲヤマは応じたはずだったんだが……この惨状だ。

「テメェ……仲間じゃねえのかよ！？」
「ひ、ひぃ！！」

ドゴォォオン！！！

カゲヤマの背中を短剣で刺した鉄の森の魔導士を一撃で沈めるナツ。
隣ではエルザがカゲヤマの意識を必死に戻そうとしている。
ダメだエルザ。今のコイツには魔法は使えない。

「え、えっと……お邪魔だったかしら……？」
「あい」
「……そういう問題か？」

ルーシィたちが後ろからやって来た。
良かった。無事だったみたいだな。

「そうだ！ルーシィ！お前の星霊で外に出れねえか！？　ほらあの時みたいに！！」
「星霊？　ルーシィって星霊魔導士なのか？」
「うん。っていうかそれは無理！！もともと人間が星霊界を通ること自体が契約違反なのに！！しかも星霊は星霊魔導士がいるところでしか呼べないの！！外に出るためにはもう一人星霊魔導士が必要になるのよ！！！」

確かに門(ゲート)はそうやってしか開けない。
クソッ。この場にアイツがいればこんな魔風壁なんかメじゃねえのに……

「あああ！！そうだ星霊だ！！」

な、なんだ！？ハッピーが突然叫びだした！？持病か！？

「ど、どうしたのハッピー？」
「これ！」
「それは……バルゴの鍵！？」

ハッピー……なんでお前がその黄道十二門の鍵なんていうレアなモンを持ってんだよ……

「勝手に持ってきちゃったの！？」
「違うよ！バルゴがルーシィに届けてほしいって言ってオイラの家に訪ねてきたんだ！！」
「バルゴが！？」

バルゴっていうことは乙女座の星霊か……やっぱり可愛い顔した星霊なのかな？

「……リョウマ？」
「何も考えてませにょ？」
「だったら何故語尾を噛む？」
「……痛ぁ！！！！」
「まったく……」

エルザのゲンコツ痛い。

しかも鎧着けたままだし。

「バルゴなら穴を掘って外に出れると思うんだ！」

「それよ！！分かったわ！！ここはあたしの出番ってことね！！我……星霊界との道をつなぐ者。汝……その呼びかけに応え、門（ゲート）をくぐれ。開け！！処女宮の扉！！バルゴ！！！」

「お呼びでしょうか？ご主人様」

メイドの星霊！？

そんなのアリか！？

「……リョウマ？」

「だから何も考えてないって！！だから剣を振りかぶるな！！」

今日のエルザはいつもに増して怖い。

って…ん？　ルーシィがバルゴにいろいろ言ってる。

多分、外に出る方法とか言ってるんだろうけどなんで姫とかいう単語が聞こえてくるんだろう？

「では……行きます！！」

おお……凄いスピードで穴を掘ってる……ここをくぐれば外に出られるってことだな！！

「行こうぜ！！急がないとマスター達がヤバイかもしれない！！」

俺たちは穴を通って外に出てエリゴールを追った。

ナツはハッピーとフィアの【翼（エーラ）】で先にエリゴールを追って行った。

それに続いて俺たちは魔導四輪に乗ってナツを追う。

俺たちが乗ってきた魔導四輪は鉄の森の連中に壊されてしまってい

たのでこれは盗んだ。
今は非常時だから許されるはず。スイマセン。
一応、操縦は俺がすることにした。
エルザが操縦しようとしたが魔力が残ってないだろと一喝してすごすごと引き下がってくれた。
あまり負担はかけたくない。

「足止め頼むぞ……ナツ……」

俺は魔導四輪の速度を一段階上げた。

――――――――――――――――――――――――

「ナツ――――――――――！！」

魔導四輪を走らせているとダウンしたエリゴールと何故か上半身裸のナツを見つけた。
エリゴールを倒したみてえだな。
流石は滅龍魔導士。

「……遅い」
「空飛べる奴が言うな。こっちだって全力出してきたんだっつーの」
「流石だなナッ」
「っていうか裸にマフラーってどうなんだよ」
「あぁ？　テメェに言われたらお終いだっての」

はぁ、何でお前らは目があった途端にケンカを始めるのかねぇ？
ってうぉ！？

「なにすんだ、カゲ！！」
「ヒャハハッ！！　＜ララバイ＞はここだぁ！油断したな妖精（ハエ）ども！！あばよ――――――――！！」
「「「「「「なっ！？」」」」」」

カゲの野郎……魔導四輪奪って逃げやがった！！

「フィア！！」
「……無理。魔力が残ってない」
「クソッ！！早く追うぞ！！」
「あんのヤロォ――――――！！」

早くしないとマスター達が……

俺たちは披露した体にムチ打って定例会の会場に向かった。

「いたっ！」
「げぇ！じーさんと一緒かよ！！」
「マスター！！」

やっとの思いで辿りついた定例会の会場の近くの森に笛（ララバイ）を持ったカゲヤマとマスターが二人で立っていた。
しかもカゲヤマの口には笛（ララバイ）が咥えられている。
あれじゃあいつ吹くか分かったもんじゃねえ！！

「しっ」

俺たちがマスターのもとに向かおうとしたところに太ったオカマの羽根生えたおっさんが立ちふさがった。
こ、この人は……

「「【青い天馬（ブルーペガサス）】のマスター！？」」
「あらぁ、エルザちゃんにリョウマちゃん。大きくなったわねぇ。ところでリョウマちゃん、ウチのギルドに入るって件について考えは変わったかしらぁ？」
「入らないって言ってんでしょ！！」

鳥肌が立ちまくって俺の肌は限界を迎えようとしていた。

妖精たちは風の中（後書き）

「始めぃ！」

By　マカロフ

ララバイ編完結（前書き）

「黒羽の鎧！！！」

By　エルザ

ララバイ編完結

『どうした？　早くせんか』
『……』

マスターに急かされてカゲヤマが笛に息を吹き込もうとしている。だけど見えない何かが彼の行動を縛りつけているようにカゲヤマは身動きが取れていなかった。

「いけないっ！！」
「黙ってなって、面白ェトコなんだからよ」

【四つ首の猟犬（クワトロケルベロス）】のマスターがカゲヤマを止めにかかろうとするエルザを片手で制している。
どうしてマスターたちは口を揃えて大丈夫というんだろうか？
まぁ、今は見守るしかないか……

『さあ』
『……！！』

カゲヤマが笛に息を吹き込もうとするが何故か吹くことができていない。
体中からは冷や汗が噴き出しており、目も血走っているが何故か笛を吹くことができない。

『何も変わらんよ』
『！？！？！？』
『弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし弱さの全てが悪（あく）ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だから

ギルドがある、仲間がいる。強く生きるために寄り添いあって歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれん。しかし、明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても　な』

皆がいるから強くなれる……
不安だからこそ仲間がいる……か。
マスターらしいな。
人の弱さを誰よりも知っているであろうマスターマカロフだからこそ言えることかもしれない。
やべっ、涙出そう。

『参りました』

眼から大量の涙を流したカゲヤマが笛（ララバイ）を地面に落として膝をつく。
やっとギルドの本当の在り方というものに気づくことができたみたいだな。

「マスター！！」
「じっちゃん！！」
「じーさん！！」
「マスター！！」

感極まった俺たちはマスターのもとに駆けていく。

「ぬぉおぉっ！？　なぜこの４人がここに！？」
「流石です！！！今の言葉、目頭が熱くなりました！！」
「痛っ！！！」

マスターが興奮したエルザに抱き寄せられている。

羨ましいな……エルザが鎧を着けていなければ。
うわぁ……痛そ……

「じっちゃん、スゲェなァ！！」
「そう思うならペシペシせんでくれい」
「一件落着だな」
「ホラ……アンタ、医者行くわよ」
「よくわからないけどアンタもかわいいわ～？」

マスターボブ……そろそろ評議院に逮捕してもらうべきかもしれないな。
見た目上の罪で。

『カカカ……どいつもこいつも根性のねェ魔導士どもだ』
「「「「「……え？」」」」」

い、今、誰が喋った？
なんか笛から変な煙出てるし……まさか……

『もうガマンできん。ワシが自ら喰ってやろう』
「笛がしゃべったわよっ！！ハッピー！！！」
「あの煙……形になってく！！！」

笛から出てきた煙が人型の木の悪魔のような形になった。
な、なななな……

「「「「「「「「「怪物――――――――！！？」」」」」」」」」

笛から怪物ポン！？
意味分かんねえ！？

俺の言ってることも意味分かんねえ！？

「こいつァ、ゼレフ書の悪魔だ！！！」

『腹が減ってたまらん。貴様らの魂を喰わせてもらうぞ』

笛が魂喰うのか……世も末だな。

「リョウマ……」

「な、なんだ？　別に変なこと考えてないぞ？」

「いや……なんでもない……」

心の底からエルザに呆れられた。

やべぇ……泣きそう。

さっきとは違う意味で。

「なに――――――っ！？　魂って喰えるのか――――――！？」

「知るかっ！！！！」

ナツもナツで変なことを言ってる。

滅龍魔導士（ドラゴンスレイヤー）ってみんな変わり者だということが今分かった。

反論は許さない。

「一体……どうなってるの？　何で笛から怪物が……」

ルーシィが体を震わせながら途切れ途切れの言葉で言う。

流石に新人にはショックがデカすぎる光景だったか……？

「あの怪物が呪歌（ララバイ）そのものなのさ。つまり生きた魔法。それがゼレフの魔法だ」

「生きた魔法……」

「ゼレフ！？　ゼレフってあの大昔の！？」
「【黒魔導士ゼレフ】魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔導士……何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてね……」

ゼレフか……おそらくこの世界で一番有名な魔導士の名前だろう。
今では禁じられている【黒魔法】の使い手。
いや、黒魔法の祖と言った方が良いかもしれない。
まぁ、説明は難しいけどとにかくヤバい魔導士のことだ。

『さて、どの魂から喰ってやろうか……メンドクサイ。全員まとめて喰ってやろう！！』

そう意味不明に締めくくった怪物の口に不気味な魔力が集まってきている。
あれは……呪歌（ラプラバイ）！！

「「「「……！！」」」」
「みんなっ！？」

これ以上好きにさせてはいけないと悟った俺、エルザ、ナツ、グレイの四人は怪物（ラプラバイ）に向かって突っ込んでいく。

「うぉおおおおおおおおりゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」
『がはっ！？』
ナツは怪物（ラプラバイ）の体を勢いよく駆け上がって顔面を蹴り飛ばす。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！【循環の剣（サークルソード）】！！！！」
『ぐっ……』

エルザは【循環の剣(サークルソード)】で怪物(ララバイ)の体に無数の穴をあけていく。
痛そう……

『ぐぉぉおお！！！！！！』
「だ、だめだ！間に合わん！！！！」
「アイスメイク……【盾(シールド)】！！！アイスメイク……【槍騎兵(ランス)】！！！！」

グレイは氷の造形魔法でララバイの体に巨大な穴をあけた。
相変わらずスゲェ威力だな……

「今だ！！」
「了解！！【海龍の……咆哮】！！」
『ぐぉぉぉあああああああああああ！！！？？？』

俺の滅龍魔法でララバイの両腕を吹き飛ばす。
そろそろ終わるな……よし。

「換装！【黒羽の鎧】！！」
「アイスメイク……」
「右手の炎と左手の炎を合わせて……」
「海龍の魔力を圧縮圧縮……」

そして……

「【黒羽の太刀】！！！！」
「【槍騎兵(ランス)】！！！！」
「【火竜の煌炎】！！！！」
「【海龍剣】！！！！」

ズバァ！！
グサァァ！！
ゴォォオオオオ！！！
ズシャァァァアアアアア！！！

トドメのフィニッシュがララバイの体に突き刺さり、ララバイは建物ごと地面に崩れ落ちた。

「本当にやるのか？」

【呪歌（ララバイ）事件】から二日後の今日、俺は約束通りナツと決闘することになった。
結局定例会の会場をぶっ潰した罪は重く、俺たちは深く反省した。
反省しただけです。
だってそれ以外にすることねえし。

「当たり前だ！！今日は勝つ！！」

「あ、そう」

今日は俺とで明日はエルザと決闘の予定を組んでいるナツ。
妥当な判断だと思う。
だって俺とエルザの二連続バトルは流石に魔力とか体力とかが尽きてしまうだろうからな。
っていうか俺、こんなに余裕層にしてるけど正直言って勝てるか分かりません。
俺の滅龍魔法って攻撃力がナツに劣るからなぁ……

「あたしこういうのダメ！どっちも勝ってほしいもん！」
「案外純情なのな……」
「リョウマ――――！！負けたら二日後の買い物は全部お前のオゴリだからな！！」

今凄く聞き逃しができない言葉が聞こえた気がする。

「エルザさん！？　俺の財布の中身の事情とか誰よりも知ってるはずですよねぇ！？」
「知ってますけど何か？」
「悪魔かお前は！！！お前の買い物っていつもいつも鎧ばっかだから金の消費率が半端ねえんだって！！！」
「鎧の何が悪い」
「値段が悪い！！お前愛用の【天輪の鎧】買った時なんか二日間の仕事の報酬が一気に吹っ飛んだんだからな！？」
「そうだったか？」
「そうだったの！！！」
「そんなにオゴリが嫌なら勝てばいいだろう！！」
「逆ギレですか！？　アンタどんだけ都合のいい思考回路してんだよ！！！」

「ダメ…か……？（うるっ）」
「ぐっ……ひ、卑怯な……」

結局ＯＫしましたけど何か？
エルザの涙目に勝てる奴連れてこい。
俺が一生師匠って呼んでやるから。

「相変わらず尻に敷かれとるのう」
「だったら止めてくださいよ。こっちだって結構苦労してるんですから」
「はっはっは。若さゆえの過ちというじゃろうて」
「意味分かんないです」
「エルザ！リョウマがこの勝負に勝ったら今夜はお楽しみじゃと言っておるぞ！！」
「はぅ……リ、リョウマが……その……シたいなら？　その……私は…ＯＫだ……／／／」
「黙ってろジジィ！！！　そしてエルザは落ち着けって！！！こんなスモール魔導士に惑わされるな！！！」

いつもいつも調子に乗って俺たちの関係をからかうんだから……
一回シメルか。

「さて、と……そろそろ始めるか？」
「おう！！燃えてきたぞ！！！」
「というわけなので審判頼みます。マスター」

二人に平等な判定ができるのはこの人しかいないということで急きょマスターマカロフが審判をすることになった。
まぁ、この人自身が面白そうだからと立候補したのもあるんだけど……

「それでは……始めぃ！！！」

「いくぞぉおお！！！！【火竜の咆哮】！！！！」

妖精の尻尾（フェアリーテイル）の二頭のドラゴンが激突した。

ララバイ編完結（後書き）

「そこまで！！！」

By　？？？

リョウマVSナツ（前書き）

「燃えてきたぞ！！！」

By　ナツ

リョウマVSナツ

「【火竜の咆哮】！！！」

ナツの口元から龍の炎の魔力でできた火炎放射が飛んでくる。
へぇ、また威力上がったんじゃねーの？
でも……こんなもんじゃ俺には効かねえ！！

「【海龍の咆哮】！！！」
「チッ！！」

俺の【海龍の咆哮】は海龍の水の魔力でできた水流を相手に飛ばす技。
しかもその水流の中に切れ味が鋭い水を含ませているからダメージも大きい技だ。
もちろん炎如き消せねえわけがねえ！！

「【火竜の鉤爪】！！！」
「【海龍の鉤爪】！！！」

俺たち二人の攻撃は今のところほぼ互角。
基本的に俺よりナツの方が攻撃力に長けている。
でも、俺は応用力と防御力でさらにその上を行く！！！

「切断系の技発動ってか！！！【海龍剣（かいりゅうけん）】！！！」

【海龍剣】。極限まで圧縮したことにより強度と切れ味が上がった水を片手剣サイズの剣に創造する技。
一応エルザに剣技を習ってんだ！！！

すぐにやられんじゃねえぞ！！！

「そら！そらそらそらそらそらぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「ぐっ…くっ…ぬりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

俺の剣を一つ一つ正確にさばいていくナツ。

しかし俺の剣の切れ味に無数の傷がナツの体に付いていっている。

やっぱり手だけで捌こうとしてるのが甘いんよね。

「んぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！うっとうしぃぃぃぃ！！！！【火竜の鉄拳】！！！！」

「うぉお！？　突然だなオイ！！！！」

轟という音が俺の耳の真横で鳴った。

今のは結構ヤバかったな。

喰らってたら即アウトだっての。

「ぶっ飛べぇ――――――――――！！！！【火竜の咆哮】！！！！」

ゴォォオオオオオオ！！！

先ほどよりも威力が高い【火竜の咆哮】が俺に襲い掛かる。

あ。これは捌き切れんわ。

しゃーねーか……新技使用しまーすっと。

「滅龍奥義！！！！【海龍乱舞（かいりゅうらんぶ）】！！！！」

パンッ！ゴァア！パシッ！

海龍の魔力を拳に込めて相手に叩き込むこの技は威力よりも手数優

先のようなもの。
だけど、ナツの炎を吹き飛ばすぐらいの威力はある！！！

「ふぅ……で、もう終わりか？」

ナツの【火竜の咆哮】を綺麗に消し飛ばした俺はその場で肩を回しながらそう言った。
俺だってエルザに扱かれながらも修行してたんだ。
まだナツに負けるわけにはいかねえ。

「まだまだぁああ！！！滅龍奥義！！！【紅蓮火竜拳（ぐれんかりゅうけん）】！！！」
「【海龍乱舞】！！！」

似たような技をほぼ同時に繰り出した俺たちの技が拮抗し合う。
ナツのパンチが俺の腹に当たり、俺のパンチがナツの顔面に当たる。
そんな技の繰り返しを何回も何回も繰り返していく。
おっ。ナツが今ふらっとした。
そろそろフィニッシュとしますか！！！

「これで終わりだナツ！！！滅龍奥義！！！【海龍蒼刃破（かいりゅうそうじんぱ）】！！！」

海龍剣を両手に持って相手を斬り刻んでいくこの技。
さすがに斬れ味は抑えているが当たると死ぬほど痛いので要注意です。

「ぐっ……ぐぁぁあああああああああ！！！！！」

ドゴォォォォオオオン！！！！

俺の技で吹き飛ばされたナツが地面にぶっ倒れた。

そして俺は寝転がっているナツの首元に二本の海龍剣を突き立てる。

「そこまでいっ！！！」

『『『わぁあああああああああああ！！！！！！！！』』』

俺が勝つ方に賭けていた奴らの歓声が上がる。
っていうか賭けしてんじゃねーよ。
俺たちは必死に戦ってたってのに。

「くっそぉ――――――！！！　また負けた！！！何でだぁ！？」

首元から海龍剣をどけた後ナツがその場に座り込んで頭を？き毟り始めた。
ナツは勝てるつもりだったんだろうな。
だって技の攻撃力的にはナツの方が強いんだから。

「ナツ。お前は一直線すぎるんだよ。だからすぐに技を読まれる」
「はぁ？　いいじゃんか一直線すぎても」

そう。ナツの一直線なところは悪いところを全部吹き飛ばすぐらいの良いところになる。
ナツは火竜の如き魔導士。
その力を扱うってんだから今のナツが一番ちょうどいいのかもしれない。

「そうか。でも今回は俺の勝ちだ。残念だったなー」
「ぬりゃぁぁあああああ！！！！次はぜってー勝ーっつ！！！！」
「させるかボケ。次も俺の勝ちだっての」
「その減らず口を次はたたき折ってやる！！！よぉぉし！！！燃え

てきたぞ！！！」

ナツがいつものようにポジティブシンキングで俺に勝つための修行法を考え始めたので俺はエルザのもとに行く。

「どうだエルザ。俺の勝ち」

「流石だな。私の相棒なだけはある」

「まぁ、仕事中にアンタに散々鍛えられてますからねー。こんなことで負けてたら俺の苦労は何だったんだ？ってことになるし」

「しかし……買い物の代金は結局オゴリにはならなかったか……」

エルザが悔しそうに俺をキッと睨みつけてくる。

はぁ……しゃーねーか。

「いいよオゴリで」

「ふぇ？」

止めろその可愛い顔。

「だから今度の買い物は俺のオゴリでいいって言ってんだ。どうせ今のところ何も買うものとかねえしな」

「リョウマ……（パァアアアア）」

やべっ。

エルザの満面の笑みがマジ可愛い。

エルザの方が年上のはずなのに……何この可愛い生き物。

『そこまでっ！！！』

パァァァァン！！！

「「「「「「え？」」」」」」

なんだ今の声。
後ろの方から聞こえたけど……！？
俺が後ろを振り返るとカエル顔の変な奴がそこにはいた。
えっと……どっかで見覚えが……

「全員その場を動くな。私は評議院の使者である」
「評議院！？」
「なんでこんなところに評議院が！？」
「あのビジュアルについてはスルーなのね……」

もうみんな気にしなくなってるのかもな。

「先日の【鉄（アイゼン）の森（ヴァルト）テロ事件】において器物損壊罪他１１件の罪の容疑で……エルザ＝スカーレットを逮捕する」
「え？」
「「なんだとぉ！？」」

エルザが逮捕！？
なんでだよ！！！
あれはみんなを助けるためにやったことだからしょうがねえだろうが！！！

「おとなしくついてきてもらおうか」
「……（コクッ）」

評議院の使者に黙ってついていくエルザ。

おいおい嘘だろ冗談だろ？

「エルザ！！！」

「オイ！落ち着けってリョウマ！！！」

「離せジェット！！！あのままじゃエルザが連れてかれちまう！！！」

「そ、そうだけどよ……」

「アイツは別に何も悪くねえのに！！！なんでアイツが全部罪を被らなきゃなんねえんだよ！！！」

大切な人が遠くへ行ってしまう。

そんなのはシーサラーの時だけでこりごりだ！！！

「みんな！！リョウマを抑え込むの手伝ってくれ！！！」

「こっちも頼む！！！ナツが暴れそうだ！！！」

「「ぐっ……」」

【妖精の尻尾（フェアリーテイル）】のみんなが俺とナツの上に乗って動きを止める。

クソ……動けねえ……

目の前ではエルザが評議院のものと思われる魔導四輪に乗せられている光景がある。

あれに乗ったが最期、俺のもとから離れてしまうってのかよ……畜生！！！

「「エルザァ――――――――――――――――――――！！！」」

俺とナツがエルザの名前を呼ぶが

エルザはそのまま評議院に連れて行かれてしまった。

クッソ……絶対に取り返してやる……

リョウマVSナツ（後書き）

「エルザを……返せ」

By　リョウマ

大切なもの（前書き）

「いい度胸してるじゃないか……」

By　エルザ

大切なもの

『こっから出せって！！！エルザを追わせろぉ――――――――！！』
「クソッ！！なんで炎でもこの縄切れねえんだ！？」

エルザが評議院の使者に連れて行かれた後、エルザの後を追おうとしたリョウマとナツをあたしたちが捕まえて動けない状態にして今に至る。
何故かリョウマは青いトカゲになってるんだけどマスターがその形に変化させたのかな？

「ダメよ。そこから出したらリョウマ、評議院を潰しかねないでしょ？」
『潰しはしねえって！！ただ俺はエルザを取り返しに行くだけだ！！！』
「ぬぁぁあああああああ！！！！！焼き切れねえぇえええ！！！！！」

「それにしても逮捕だなんて……」
「相手は評議院だ。ウチが何と言おうとあいつらが黒といえば黒になるんだよ」
「でも……これは不当逮捕じゃないの？」
『不当とかいう問題じゃねえ！！！俺はエルザを助けに行く！！！だからこっから出せぇ――――！！！』

評議院は全国の魔導士からあまり好かれていないらしいの。
秩序秩序秩序。すべてをルールで縛ろうとする評議院の姿勢が受け入れられない。

だってこんな不当逮捕なんてするぐらいだもの……

「もう！やっぱりエルザを取り返しましょう！！」

「落ち着かんかルーシィ……」

「何言ってんの！？　これは不当逮捕よ！！！」

「そんなこと言ってもな……今の俺たちにできることなんて何もねえんだよ」

『話し込んでないで俺をここから出してくれぇ――――――――！！！』

「本当に出しても良いのか？」

「「「「「「「え？」」」」」」」

リョウマが何度目か分からない叫びをした時、

マスターがそんなことを言い出した。

『……』

「どうした？　いきなりおとなしくなったではないか」

「ぐっ……ヤベッ」

何故かナツの頬に脂汗が浮かんでる。

え？　なんで？

ナツ……何かやったの？

「カッ！！！」

『ぐぁあああ！！！』

「ヤベェ……」

「「「「「「なっ！？」」」」」」

マスターがトカゲの姿になっているリョウマに向かって魔法を放ったの。

そしたら……そのトカゲがマカオの姿になったのよ！！！

「なんでマカオが……」

「ナツには借りがあってよ、それでリョウマの身代わりになってほしいって頼まれたから仕方なく……」

「ナツ……」

「だ、だってリョウマがどうしても行きたいって言うからよぉ！！！っていうかアイツを止められる奴がここのギルドにいんのか？リョウマはエルザのことになると誰にも止められないぐらい暴れまわるんだぞ？」

「「「「「うっ」」」」」

ナツの言葉にミラさんとグレイとフィアとカナとエルフマンがかなり恐怖した表情になった。

一体何をしたの！？　このメンバーが揃いも揃って恐怖する事って何！？

「で、でも流石に評議院に手は出さないだろ……」

「エルザの悪口言われたからって闇ギルド一つ一人で殲滅したことがあるけどね……」

「あの時のリョウマは……漢（おとこ）だった……」

「うっ」

す、すごいことやったのね……たった一人でギルド潰すって……怒りって怖い。

「全員黙っておれ。静かに結果を待てばよい」

マスターが凄く怖い。

――

『被告人エルザ＝スカーレットよ。先日の鉄の森(アイゼンヴァルト)によるテロ事件においてはオシバナ駅一部損壊。リュシカ渓谷鉄橋破壊。クローバーの洋館全壊。……これら破壊行為の容疑にかけられている。目撃証言によると――――――――』

ドゴォォォオオオン！！！

『何事!？』

ふぅ……脆い壁だったなぁ。
ちゃんとリフォームしとけっての。
じゃねーと……すぐに破っちまいそうになるからな。

「よぅ評議院。早速だが…………エルザを返してもらおうか？」

「「「………………」」」

「はぁ…バカリョウマが……」

「え？」

なんでみんな静まり返ってんの？
そしてエルザは何故溜め息吐くし。
全く意味が分かんねえ。

「はぁ……二人を牢へ」
「……すいません」
「え？　え？」
俺は全く状況がつかめないままエルザと共に牢屋に連れて行かれた。

「ったく……なんてことをしてくれたんだ」
「本当に申し訳ございません」
あの後エルザからこれは形だけの逮捕であり罪にはならないということを説明された。
その時の自分の顔は真っ青に青ざめていたことだろう。
そして今はエルザに向かって全力の土下座をしている。
本当に恥ずい……
「貴様がこんなことをしなければ今日中には帰れたはずだったんだ」
「ゴメンナサイ」

「なのに貴様のせいでこんな固い床の上で今日は寝なくてはならない」
「本当に反省してます」
エルザが額に青筋を浮かべながら説教してきますハイ。
しかも１０割俺が悪いんでまったく言い訳ができないってのが辛い。
あぅ……そろそろ足がしびれてきた……
「だが、まぁ……その…嬉しかったぞ／／／」
「っ！？／／／　お、おう……／／／／」
そして俺たちは翌日に釈放されて妖精の尻尾（フェアリーテイル）に帰ることができた。

「すまん遅れた！！」
釈放されてから一日たった今日、俺は約束通りエルザと買い物をすることにした。
まぁ、そんなわけなんだけどまさかの遅刻スタート。
エルザの後ろに修羅が見えるような気がする……

「いい度胸してるではないか……あぁ？」
「マジですいませんゴメンナサイ許してください！！！でもこれには深い事情が……」
「なんだ？聞いてやってもいい」
「さんきゅーエルザ！！実はフィアに起こしてくれるように頼んでて、時刻通りにフィアに起こしてもらったわけだ。けどそこからやけに眠気が襲ってき――――――――――あ」

今思ってみればこの言い訳って自分の首を斬り落とすぐらい致命的な言い訳じゃね？
うわぁ……見ろよエルザの今の顔。
なんか虫けらを相手にしてる時の表情だぜあれは。

「……辞世の句を読むがいい」
「ストップエルザさん！！！俺はまだ死にたくない！！！」
「黙れ！！！結局はお前が二度寝してしまっただけだろう！！！」
「その点についてはかな～り反省してる！！！だから許して！！！な？」
「……はぁ、しょうがない。今回だけだぞ」

そう言って剣を戻すエルザ。
良かった……死ななくて済んで。

「で。どっから行くんだ？」
「そうだな。じゃあ――――――――」

そして俺とエルザは久しぶりに休日を堪能したんだ。
俺の財布はすっからかんになっちまったけど……はぁ。

――――――――――――――――――――――――――

「ふぅ……今日は楽しかったな……」

妖精の尻尾の女子寮の食堂で夕飯を食べながらエルザがそう呟く。

彼女はその強さのせいで恐ろしく思われているがまだまだ年頃の女の子なのだ。

「へぇ～楽しかったんだ～リョウマとのデート」
「羨ましいね。異性と足の疲労させに行くなんて」
「いやそこはデートって言おうよラキ……」
「わ、私だって次こそはアルザックと……」
「っ！？／／／」

そしてエルザの呟きを聞き逃さなかったレビィ率いる女子寮メンバーがニヤニヤしながらエルザの方を見る。
これが妖精の尻尾の女子寮の暗黙のルール。
誰か一人でも楽しいことがあったならば根掘り葉掘り聞きだすこと。

「で、何をしたの？　デートっていうからやっぱり手とか繋いだ？」
「……………ああ／／／」

「口の中掘りあったりした？」
「なっ……／／／」
「だからラキはどうしてそうややこしい言い方をするかなぁ！？」
「だってつまらないでしょ。普通に聞くなんてー。やっぱり変な言い回しが一番だと思わない？」
「もう、いいや……」

ラキの変な物言いに心の底から疲れたような表情をするレビィ。
その隣では涙を流しながら料理を平らげていくビスカの姿が。
頑張れ。信じていれば明日は煌めく。

「ごちそうさま！！」
「「あ！逃げた！！」」

ドグシャア！！

食事を終えたエルザはレビィとラキを血祭りにあげて自室へと戻っていった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ふふっ」

自室に戻ったエルザは窓を開け放ってその縁に座っていた。
手には今日リョウマに買ってもらった緋色の宝石が付いた首飾り。
今までにもリョウマに物を買ってもらったことはあるがこんなに豪華なものは初めてのようだ。
だからこそこんなに嬉しそうな表情をするのだろう。

「キス　か……」

自身の唇を人差し指で抑えてエルザは呟く。
別にリョウマとキスをしたことが無いわけではない。
ただ……キスというものはそんなに軽々しくして良いことではないとエルザは思っている。
いつまでも一緒にいられるわけではないかもしれない。
こんな仕事をしている以上命の危険はあるし時には死ぬかもしれない。
だからこそエルザは……

「いつまでも傍にいられるように私も頑張らなくてはな……」

どんな時もリョウマに守ってもらってばかりでは駄目。
そうエルザが思い始めたのはリョウマとチームを組んで一年たったころのことだ。
それから何年もたってエルザはリョウマよりも先にS級魔導士になった。
その時のS級魔導士昇格試験にはリョウマも出場していた。
しかしリョウマは悔しそうにはしながらも心の底からエルザを祝福したのだ。
相棒でありライバルでもあるリョウマとエルザ。
彼と彼女は共に支え合うことを望んでいる。

「さて！明日は久しぶりにリョウマと仕事にでも行くか！！！」

……まぁ、別にリョウマと仕事に行くのは久しぶりというワケでもないが……

「くしゅん！！　なんだ……凄く寒気がする……」

「……エルザがまた仕事に行くことを考えてるんじゃないか？」

「それはそれで洒落にならん」

大切なもの（後書き）

「エルザはナツたちを追って行ったのか……ご愁傷様だナツ」

By　リョウマ

平和な一日？（前書き）

「黙ってろクソガキ！！」

By　ラクサス

平和な一日？

今日は久しぶりに仕事も何もない全くの休日。
フィアはまだ家で寝てる。
俺は暇だったので妖精の尻尾（フェアリーテイル）のギルドに来たんだけど……

「あれ？　エルザは？」

今日は珍しくエルザに会わない。
どっか行ったのかな？
まさか一人で仕事とか？

「ナツたちを追いかけて行ったわ」
「ナツ？　なんで？」
「……勝手にS級クエストに行っちゃったのよ」

ミラが顔に影を落としてそう言った。
眼には力がこもっていなくて表情も悪い。

「マジか……」
「グレイが捕まえに行ってくれてたはずなんだけどまだ帰ってこなくてしょうがなくエルザが……」
「死ぬんじゃないかナツたち。違う意味で」

誰よりも規律に厳しいエルザが追いかけて行ったんだ。
流石に無事じゃあ済まないだろう。
ご愁傷様。

「ん？　ナツたちって……ナツとハッピーだけ？」
「……ルーシィ」
「はぁ……またあのトリオか……で、何のクエストに行ったんだ？」
「……ガルナ島の呪いを解くクエストよ」
「げぇ！！呪いの島かよ！！」

ガルナ島。
昔から悪魔の島と呼ばれている島の名前だ。
勿論誰も近づかないし誰も行かない。
無事に帰ってこれないらしいからなー。

「ま、エルザがいるなら大丈夫だろ。んでちょっと聞きたかったんだけどタツヤはまだ帰ってきてねえの？」

タツヤ。
フルネームで呼ぶとタツヤ＝カオスロッド。
妖精の尻尾（フェアリーテイル）の６人のＳ級魔導士の一人だ。
しかしその実力は他のＳ級魔導士が相手にならないほど別格。
使用する魔法の名前は【光闇魔法（ライト＆ダークネス）】。
究極魔法の一つだ。
使用者ですら制御が難しいと言われるこの魔法をタツヤは完璧に制御している。
昔はミラと一緒に仕事に行っていたんだけどミラが引退してからは一人で仕事に行くようになった。
っていうか一人で仕事に行かないと自分の魔法に巻き込まれてしまうらしい。
どんだけ強力な魔法だよ光闇魔法……

「ふふふ……連絡の一つもしてくれないのよ？　こっちがどれだ

け心配してるか知りもしないで……」
「グラスが割れるグラスが」
「手紙を送るけど返事無し。ねぇどう思う！？」
「知らねえよ！！！そんな意味不明な八つ当たりを俺にするな！！！」

とりあえずミラから離れよう。
変なスイッチが入ったみたいだからな……怖かった。
えっとどっかに暇そうな奴はーっと……あ、いたいた。

「よぉラクサス。元気してる？」
「あぁ？　なんだリョウマか……」

このツンデレ系二十代はマスターマカロフの孫であるラクサス＝ドレアー。
S級魔導士のうちの一人だ。
基本的に強いやつ以外は興味が無いという性格をしていてみんなには嫌われている。
まぁ、俺は仲良い方だけど。

「相変わらず一人でいますねアンタ。雷神衆はどうしたよ雷神衆は」
「俺はあいつらの保護者じゃねえんだ。知るわけねえだろ」
「はぁ、育児放棄か。泣くぜあいつ等」

ガタンッ！！！

「お前マジで殺すぞ。あぁ？」
「やってみろよ雷野郎。前みたいにボコボコにしてやろうか？」

バチバチバチバチィ！！！

睨み合う俺とラクサスの間に火花が散る。
気のせいか他のみんなが距離を空けている気がする。
まぁ、しょうがねーと思うけど。

「止めんか！！」
「あ、マスター」
「チッ」

カウンターに腰かけていたマスターの怒号が飛ぶ。
俺とラクサスの喧嘩を止められるのは今のところタツヤとマスターの二人だけ。
他のみんなは巻き添え喰らって倒れるから止めることができないってワケ。

「なんでお主らはそう顔を合わせては喧嘩ばかりしとるんじゃ……」
「すいませんマスター。貴方の孫の顔がどうしても気に食わなくて」
「表出ろクソガキ！！体の電気信号狂わせて一生動けねえ体にしてやる！！」
「あぁ！？　テメェこそその首斬り落として人生終わらせてあげましょうかぁ！？」
「止めんかぁあああああ！！！！」
「「ぐぶぇ！！」」

堪忍袋の緒が切れたマスターが巨大化させた拳で俺とラクサスを叩き潰した。
あ……相変わらずの破壊力だ……

「な、何しやがるジジィ！！」
「ラクサス！！！お主はもっと協調的にはなれんのか！？」

「無理だ」

「断言してんじゃねーよツンデレ魔導士！！」

「誰がツンデレだコラ！！テメェは頭の中身も水で埋まってんじゃねえのか！？」

「【海龍の鉄拳】！！！」

「うおぉ！？あぶねえ！！いきなり魔法使ってんじゃねーよクソガキ！！！」

「俺は子供だから自分を抑えられないんですぅ！！！【海龍の鉤爪】！！！」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！！！」

ドカッ！！バキッ！！グシャッ！！！

もはや妖精の尻尾（フェアリーテイル）名物とでも言えそうな俺とラクサスの殴り合い。それに巻き添えを喰らって壊れていくギルド。

そして…………本気でキレるマスターマカロフ。

「やかましいわぁぁああああああああああああ！！！！」

「「ぐぺっ！？」」

しーん…………

マスターに再び叩き潰された俺の意識はそこで途切れることとなった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「イテテ……派手な攻撃しやがって……」

俺とラクサスの喧嘩があった晩、俺は自分の家で水魔法の特訓をしていた。

【化け猫の宿（ケットシェルター）】とかいう魔導士ギルドにいる天の滅龍魔導士は治癒魔法とか言う珍しい魔法が使えるらしい。

流石に俺も防御メインの水の滅龍魔法ばかりでは戦いで不都合が出るかもしれない。

だから少しでも水魔法の攻撃魔法を増やしていかねーと……

「……おい、リョウマ。この魔法とかいいんじゃないか？」

「んー？　【狙撃水銃（スナイパー）】？　ってこれ遠距離技じゃん。俺に敵と戦うとき毎度毎度遠くに行けって言ってんのか？　しかもこの技は既に習得済みだ」

「……じゃあ、これは？」

「【雨（レイン）】？　いやこれ絶対役に立たねえだろ」

「……お前なら『エルザが薄着の時にしたら下着が見えるかもな！！』とか言ってOKするかと思った」

「お前どんだけ俺をおかしい変態だと思ってんだよ！！！別にそんな魔法とかいらねえし！！」

「……じゃあこの『習得済み』のしるしは何？」

「……さ、さぁ？　何でしょーねー？」

「……一片エルザに殺されろ」

「やかましい！！！良いじゃねえか魔法のレパートリーが増えるわけだし！！暑いときとか便利そうだし！！！」

「……そう、だな」
「なんでそう何かが歯に挟まったような物言いをするかなぁ！？」
「……いや、別に何も思ってはいな――――――」

ドゴォォオオオオオオンッ！！！！

「「！？」」

突然俺たちの耳に激しい音が聞こえてきた。
あの方角は……妖精（フェアリーテイル）の尻尾のギルド！？

「フィア！！」
「……了解。【翼（エーラ）】」

翼を生やしたフィアが俺の首元を掴んでギルドに向かって飛翔を始めた。
一体何があったんだ……？
俺はギルドへと急いだ。

──────────────

「う、ウソだろ……」

ギルドへと向かった俺を待っていたのは予想だにしない光景だった。
なにか巨大な何本もの鉄の棒状のものが突き刺さってボロボロの状態になっている俺たちのギルド。
もうすでに補強できるレベルじゃない。

「俺たちのギルドが……」

俺はおぼつかない足取りで地面に転がっていたギルドの看板を拾い上げる。
半分に折られてしまった看板。
俺は7年前にこの看板に未来の希望とシーサラーを絶対に見つけることを誓ったんだ。
このギルドだって俺が入ってから一度も姿を変えたことは無かった。
だけど……今のギルドはもはや廃墟なような外見になってしまっている。
だれがこんなひどいことを……

「…………リョウマ、あそこに描かれている紋章って……」
「紋章……？」

傍に立っていたフィアがギルドを指差してそう言った。
その指の先を見つめるとそこにはかなり見覚えのある紋章が描かれていた。
あの紋章は……

「【幽鬼の支配者（ファントムロード）】……」

「……ウチとは仲が悪いからな……」
幽鬼の支配者ってことはギルドを壊したのは鉄の滅龍魔導士のガジル＝レッドフォックスか？
ははっ、相変わらず舐めたマネしてくれてんじゃねーか……
ざー……
壊れたギルドを清めるかのごとく大雨が降っている。
「すぅ～……」
俺は静かに雨を体に取り込んでいく。
憎しみ。
憎悪。
憤慨。
怒り。
その単語が俺の頭を蝕みそうだったから頭を冷やしたかったんだ。
「……ごちそうさま……おかげで少しは落ち着いた」
俺の体から海龍の魔力が漏れている。
容量以上の水を吸収してしまったので体に入りきらなかったのだろう。
だからどうした。
確かに憎しみは何もいい結果を生まない。
けど……
「絶対に叩き潰してやる……【幽鬼（ゾンビども）の支配者】がァ……」

ベキィ！！！

俺の体から漏れた魔力がギルドに刺さっていた鉄塊を一本へし折った。

今はまだ行動を起こしてはいけない……

マスターがＯＫというまでは怒ってはならない……

これは準備だ。

あの幽鬼（クズ）の支配者どもをぶちのめす為のな……

「……リョウマ……」

心配そうな顔をしたフィアが俺の顔を覗き込む。

大丈夫だ。そう俺は返してフィアと共に家へと帰った。

心の中に怒りという名の悪魔を飼って……

平和な一日？（後書き）

「子供（ガキ）に手ぇ出されて黙ってる親はいねえんだよ……」

By　マカロフ

妖精の怒り（前書き）

「ファントム……」

By　ルーシィ

妖精の怒り

結果論

昨晩、悪魔を飼っているだの怒りに震えているだの言っていた俺だがS級クエストから帰ってきたエルザに『そんなことでは【幽鬼の支配者(ファントムロード)】と何も変わらんだろうが！！！』と説教されてしまって悪魔死にました。

弱ぇ……俺の中の悪魔弱ぇ……

んで、今はルーシィの家にいます。

……いや不法侵入ですけどちゃんとした正当な理由(わけ)があるんだって。

ギルドが壊されてまだ一日しか経ってないから一人での行動は避けた方が良いとミラが提案。

そしてチームごとに今日は過ごすということに。

俺はエルザと二人でチーム組んでるんだけどフィアとかナツたちを放っておいては危ないんじゃね？という考えにいたって今ここにいる。

「多いっての！！！」

ゴガァッ！！！

因みに今のは帰ってきたルーシィがナツの顔面にスーツケースを投げた音。

痛そうだなオイ。俺だったら泣いてるぞ絶対。

「おかえりルーシィ」

「よう、ルーシィ」
「……お邪魔してる」
「世話になるぞ」
「……」
「……すまんルーシィ……いろいろと……」
「リョウマだけはまともな考え持ってるのね……」

あからさまに肩を落として溜め息を吐くルーシィ。
本当に申し訳ない。でも、これが妖精の尻尾（フェアリーテイル）なんだよ……

「で、なんでみんなここにいるの？」
「えっとそれはかくかくしかじかで……」
「へぇ…そうなんだぁってそんな創作ものでしか使わないような言葉で状況が伝わるわけないでしょ！？」
「だって話せば長くなるし……」
「長くなってもいい！！だからちゃんと説明をして説明を！！」
「あい。一人での行動は危ないからチームで固まるってことになったんだ」
「……要するに安全対策」
「全然長くならないじゃない！？　ってこらぁ！！勝手に読まないでよグレイ！！」
「あ！」

半裸のグレイが椅子に座って読んでいた複数の原稿用紙を鬼の形相で奪い返すルーシィ。
もしかして自分で小説でも書いてるのかな？　そうだとしたら今のグレイの行動はかな～りダメなんじゃないかと思う。

「それにしても汗臭いなお前たち。同じ部屋で寝るんだ。風呂にぐらい入れ」

「やだよ、めんどくせー」
「俺は眠ーんだよ。入りたいならリョウマと二人で入って来い」
「「な……／／／」」

エルザと一緒に風呂！？
いやいやいやいやそんな嬉しい展開してる場合じゃねえし！！
今は緊急事態だし！！

「……エルザ？（じとー）」
「な、なんだルーシィ！！わ、私は別に期待してなどいないぞ！？」
「……エルザ、本音が漏れてる」
「あい。正直なんだねー」
「ぬぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？／／／／／」

顔を真っ赤にして煙を上げるエルザ。
何この可愛い生物。お持ち帰りしてもいい？

――――――――一時間後

「ねぇ…例のファントムってなんで急に襲ってきたのかなぁ？」

風呂から上がってきたルーシィが頭をタオルで拭きながらそう聞いてきた。
まぁ確かにその点は気になる。何故このタイミングなのか。どうしてウチなのか。

「さあな……今まで小競り合いはよくあったがこんな直接的な攻撃は初めての事だ」

パジャマに換装したエルザがベッドの上に腰を下ろしてルーシィの問いに答えた。
アンタは人の家のベッドを占領するつもりですか……？

「じっちゃんもビビッてねえでガツンとやっちまえばいいんだ」
「じーさんはビビってる訳じゃねえだろう。あれでも聖十大魔導（せいてんだいまどう）の一人だぞ」
「聖十大魔導（せいてんだいまどう）？」
「魔法評議会の議長が定めた大陸で最も優れた魔導士十人につけられた称号だ」
「へえー、すごぉい！！」
「ファントムのマスター・ジョゼも聖十大魔導の一人なんだよ！」

そういえばそうだった。
あのイカレ幽霊野郎もマスター・マカロフと同じ称号を持ってるんだっけ。
まぁ、ファントムのマスター張ってるだけはあるってか。

「ビビってんだよ！！ファントムって数が多いしさ！！」
「うわわ……」
「だから違ーだろ」
「ああ。マスターもミラも俺たち妖精の尻尾と幽鬼の支配者の二つ

のギルドが争えばどうなるかを分かってるから戦いを避けてるんだ。
魔法界全体の秩序を守るためになー」
魔法界のバランスというものは人が思っているよりもずっと脆い。
大きな力を持っている魔導士ギルドが争いを起こせば周囲の自然や町に大きな被害を出すことがある。
そうなってくると魔法評議院に責任問題が来る。
アイツらは嫌いだけどアイツらがいないことには魔法界が成り立たないことも事実。
複雑な世界なのさ。ここは。

「そんなに凄いの？　ファントムって」
「たいしたことねーよ、あんな奴ら！！！」
「いや……実際、争えば潰し合いは必至。……戦力は均衡している」
そう。俺たち妖精の尻尾（フェアリーテイル）と幽鬼の支配者（ファントムロード）の実力はほぼ同じ。あっちには強大な魔導士が多くいる。しかも人数が多いから数で押し切られてしまう可能性もある。
そして残忍だしな……

「ファントムには強大な魔導士が多くいるんだ」
「マスター・マカロフと互角の魔力を持つと言われている聖十大魔導のマスター・ジョゼ。そして向こうでのS級魔導士にあたるエレメント4．一番厄介だとされるのが鉄龍（くろがね）のガジル。今回のギルド強襲の犯人と思われる男。鉄の滅龍魔導士」
「滅龍魔導士！？」
「「（フン）」」
「ナ……ナツとリョウマ以外にもいたんだ……じゃ、じゃあそいつ……鉄とか……食べちゃう訳！！？」

まぁ、鉄の滅龍魔導士だしそうなんじゃねーの？
俺は水の滅龍魔導士だから水分食べるしナツは火の滅龍魔導士だから火を食べる。
滅龍魔導士は食べるものが二つ名に入ってることが多いから分かりやすいんだよ。

「それじゃあもう寝るとしよう。疲れはとっておかないとな」

エルザはそう言ってベッドに潜り込む。
それを見ていたルーシィがはぁぁぁぁ……とため息をついて渋々ソファの上で毛布をかぶって横になった。
ナツとグレイとハッピーとフィアは床にごろんと横になってすでに寝ている。
俺はそんな光景を見て一人思っていた。
もうギルドが壊されるより酷いことなんて起きるんじゃねぞ　と……

マグノリアの街
南口公園

まだ朝だというのにそこにはかなり多くの人が集まって騒然としていた。

まさか……クソッ！！

「すまん通してくれ。ギルドの者だ」

「どいてくれ！頼む！」

嫌な予感に包まれた俺たちは集まった人たちの間を縫って進んでいく。

この方向は南口公園の大樹の方向だ。

この公園のシンボルとされている大樹。

かなりの年月成長している大樹だしマグノイアの名所としても有名だ。

って今はそんなことどうでもいい。

「なっ……」

「くっ……」

「ファントムゥ……」

「きゃっ……」

人ごみを抜けた先には目も当てられないような光景が拡がっていた。

先ほど言っていた大樹の幹に見覚えのある三人の魔導士がぼろぼろの状態ではりつけにされていたんだ。

一人は文字の魔法を使うレビィ＝マクガーデン。

ルーシィと仲が良くてよく一緒に話している少女だ。

そして残り二人はジェットとドロイ。チーム・シャドウギアというチームのメンバーだ。レビィもそのチームの一員で三人でよく仕事に行っている。

その三人が今俺たちの目の前で血まみれで張り付けにされている。

「レビィちゃん……」

「ジェット！！ドロイ！！」

「っ……」
「ファントム……」
幽鬼(ファントムロード)の支配者の野郎ォ共が調子に乗りやがって……
どこまで俺たちをバカにすれば気がすむんだ……
大切なギルドを破壊したと思ったらお次はギルドより大切な妖精(フェアリーテイル)の尻尾の仲間がターゲットですってか？
許さねえ……絶対に許さねえ……

ザッ

後ろから誰かが良いおいよく地面を踏みしめる音が聞こえてきた。
俺はその音に釣られて後ろを振り返る。
そこにいたのは白い魔導着を着用したマスター・マカロフの姿が。
マスターはゆっくりとこちらに向かって歩いて来、大樹に張り付けにされているレビィ達に視線を向けた。
その顔に浮かんでいる表情は怒り怒り怒り。
今まで見たこともないような顔がそこにはあった。
マスターの後ろに集まっている仲間(バカ)たちも皆全く同じ表情をしている。

「ボロ酒場までならガマンできたんじゃがな……」

ぞわっ

マスターから大量の魔力が漏れ出してきている。
怒りとはここまで人を怖ろしいものに変えてしまうものなのか。
あんなに温厚なマスターが心の底から怒り狂うほどの光景。
ギルドマスターにとってギルドの魔導士は自分の子供(ガキ)そのもの。
俺たちにとってマスターは親そのもの。

妖精の尻尾（フェアリーテイル）は大きな家族。
共に支え合い共に生きていく。
そして家族を傷つけた者は…………絶対に許さねえ。

バキィ！！

マスターの握力に耐えきれなかった杖がマスターの手が触れている部分から真っ二つに折れてしまった。
その光景を俺たちはただただ黙って見続ける。
その胸に抱く気持ちは皆同じ。

「ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ……」

大切な仲間が傷つけられた。
大切な家が破壊された。
大切な家族を馬鹿にされた。
俺たちは妖精の尻尾（フェアリーテイル）。
仲間が傷つくことを何よりも嫌う魔導士の集まり。
家族の敵は絶対に滅ぼす。
それがたとえ俺たちと同じぐらいの実力を持っている魔導士ギルドだとしても滅ぼす。
跡形もなく壊しつくしてやる。
これは幽鬼の支配者（ファントムロード）からの挑戦状だ。
だったら乗ってやる。　その挑戦。
こっちだっていつまでも逃げてばかりじゃねえんだよ……

「戦争じゃ！！！！！！！」
「「「「「「「「「応！！！」」」」」」」」」」

そして俺たちは足を進めた。
目指すは幽鬼（ファントムロード）の支配者の本部。
完膚なきまで叩き潰してやる……
俺たち全員は怒りを胸にファントム滅殺へと足を進めた。
これは俺たちの復讐。
正義の者の復讐だ。

妖精の怒り（後書き）

「ギヒッ！」

By　ガジル

幽鬼の支配者への復讐（前書き）

「俺の本当の力を見せてやる……」

By　リョウマ

幽鬼の支配者への復讐

「やっと着いたか……」

マグノリアの街から歩いて幽鬼の支配者（ファントムロード）のギルドへと来た俺たち。それぞれの魔力を練りに練って完全に戦闘準備を終わらせている。

「さて……どうやって入る？　やっぱりドアぶっ飛ばすか？」

「「「異議なし」」」

とりあえず入館方法は決まった。ドアをぶっ飛ばす係はナツにやってもらおう。一番攻撃力があるしナツの炎でギルドが燃えたら一石二鳥だしな。さて、俺はどいつから倒そうかな？　やっぱりエレメント４とかいう連中をぶっ飛ばしたい。鉄龍（くろがね）のガジルはナツに任せよう。アイツの方がガジルに怒りを覚えているからいい感じに暴れまわってくれるだろうし。

よし。方針も決まった。

「ナツ。よろしく」

「おう！」

俺が声をかけると夏の周りの空間が揺らめきだした。これはナツの体から漏れる炎が空気を暖めているから起きている陽炎。普通はかなりの高温でしか発生しないのだけど今のナツから漏れる炎の温度はちょっと離れているエルフマンに大量の汗をかかせるぐらいだ。それぐらい怒っているということだろう。

「みんな離れてろよ……ぶっ飛べぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

！！」

ゴッッシャァァァァァァアアアアアア！！！！！

ナツが全身の力を込めてファントムのギルドの正面玄関をぶっ飛ばした。なんか今のナツの攻撃に巻き込まれたファントムの魔導士がいたような気がするがどうでもいいや。どうせみんな潰すんだし。

「妖精の尻尾（フェアリーテイル）じゃぁあああ！！！」

「「「「「うぉぉおおおおおおお！！！」」」」」

マスターの叫びを合図に俺たちはファントムの魔導士たちに突っ込んでいった。ナブはその怪力で魔導士をぶっ飛ばしマックスは砂の魔法で視力を奪う。

「ぐっ……強ぇ……」

「兵隊どもの強さが半端ねえだろ！？」

俺たちの鬼気迫るオーラに思わず逃げ腰になるファントム。お前たちはまだ分かっていない。俺たちよりもトサカに来てるのは一体誰なのかを……

「ふんぬっ！！」

「「ぎゃぁ――――――！！」」

「ひ……ひぃ！バケモノ！！」

巨大化したマスター・マカロフが足元に群がるファントムの魔導士を踏み潰し叩き潰している。あれが巨人の怒りか……よかった味方で。

「そのバケモノのガキに手ぇ出したんじゃ！！人間の法律で裁かれると思うなよぉぉおおおおお！！！！」

「ぐはっ！！」

完全にキレているマスターがギルドを壊さんとする勢いで暴れまわっている。マズイな……熱くなりすぎて冷静さを欠いてる。このままじゃ実に小さなミスをしてしまう可能性が……ま、いっか。そんなこと絶対に聞くような状態じゃねえし。俺たちには何の害もねえんだしな。

「はぁ……マジで死ねよお前ら。【海龍の羽ばたき】！！」

俺が両手を横に伸ばすと海龍の魔力が水となって縦横無尽にギルド内を駆け巡り始める。この技は防御メインの水の滅龍魔法において唯一敵の動きを止める技。この水が相手の足に絡みついてどんな敵も逃がさない。若い女性には使っちゃだめだぞ♪おもに見た目と年齢制限上の理由で。

「なっ……足が動かねえ！？」

「ぐぁ！！ぶ、武器が！！」

「はいはいその物騒なモン捨てて呼吸困難で堕ちろ。キル・ユー」

「「「「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！かはっ……」」」」

これで結構なファントム撃沈。死んではないだろうけど水恐怖症にはなるかもね。まぁ、自分がファントムなんか言うクソ魔導士ギルドに入ってしまったことを呪うんだな。他のギルドにいたらもっとまともだったはずだろうに。バカな奴ら。

「私も負けてられんな！！換装【天輪の鎧】！！【循環の剣（サークルソード）】！！！」

「「「「ぐわぁあああああああああ！！！！！」」」」

妖しい笑顔でファントムの連中を葬っていくエルザさんマジパネェっす。見ろよあの顔。絶対に夢に出てくるって。怖いもん。あれじゃあ【妖精女王（ティターニア）】っていうより【妖精覇王（ヴァルキリー）】って感じだろ。

「ガァァァァジィィィルゥゥウウウウ！！！！！」

「ギヒッ！！火の滅龍魔導士のチカラってのはそんなモンなのかよ！！なぁ？」

「うっせぇ！！俺は絶対にお前を許さねえ！！【火竜の咆哮】！！」

「ギヒッ！【鉄龍の咆哮】！！」

ガガガガガガガガ！！！

ナツの火竜の咆哮とガジルの鉄龍の咆哮がぶつかり合って耳に触る金属音を辺りにまき散らす。ぐぅ……これはこれでいろいろとキツイもんがある……

「ジョォォォオオゼェェエエエエエエエエエ！！！！出てこんかいいいいい！！！」

「おいおいマスター大丈夫かよ……」

「大丈夫なんじゃね？　どうせ壊れるのはファントムのギルドなんだし」

「「余所見してんじゃねぇよぉ！！」」

「五月蠅い雑兵が！！」

「不意打ちとは……漢（オトコ）じゃねえなあ！！」

「「ぐわふぇ！！」」

俺とエルフマンの背後から魔法剣を振りかぶって襲ってきたファントムの連中が拳一つでダウンさせられた。相手が悪かったな。より

にもよって俺とエルフマンを狙うとは……

「ココは任せたぞ！！ワシは二階へ行ってくる！！」

「お気をつけてマスター！！」

マスターが二階に上がっていったか……これはマスター・マカロフ対マスター・ジョゼが勃発するんだろうか……天変地異とか起きなければいいけど。まぁ、今はそれよりもファントムとぶっ飛ばす方が優先だな。

「一気にカタを着けてやる！！【海龍の咆哮】！！！」

「「「「「うぅあああああああああ！！！」」」」」

「次！！【海龍の鉄拳】！！！」

「「「「「ぐぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」」」」

「トドメ！！滅龍奥義【海龍蒼刃破】！！！」

「「「「「ギャィィァァァァァァァァ！！！！」」」」」

俺の攻撃魔法は主にこの三つだ。ハッキリ言って攻撃力は期待できねえ。でも、攻撃力って言うよりもこの技は相手に致命傷を負わせる技だ。切れ味をいつもの数十倍よくした俺の水の味はどうですかぁってなぁ！！！！

「ギヒッ！！テメェが【海龍（リヴァイアサン）】のリョウマか？俺とも遊んでくれよ！！なぁ！？」

「くっ……鉄龍（くろがね）のガジルか……」

「随分と俺様も有名もなったもんだな！！ええ？オイ！！【鉄龍剣】！！」

「チッ！！【海龍の波動】！！」

ガィィィイイイン！！！

ガジルが剣に変形させた腕を俺に向かって振り下ろそうとした瞬間、俺の目の前に巨大な水の盾が出現した。自分の攻撃が簡単に止められてしまったことが気に食わないのか不快な表情を浮かべるガジル。これが俺の滅龍魔法の神髄。海龍の鱗は全てを阻み、海龍の水は全てを切り裂く。海龍の叫びは全てを飲み込み、海龍の翼は全てを受け付けない。その魔力を纏いし魔導士には絶対の防御力アリ。っていう伝承があるぐらい水の滅龍魔導士の防御力はピカイチだ。こんな剣ひとつ防げねえわけない！！

「へッ！！そんなモンか？　鉄くずヤロー」

「あぁ！？　海蛇如きが何言ってやがる！！【鉄龍槍】！！！」

「だーかーらー……効かねえって言ってんだろ！！ナツ！！」

「おう！！【火竜の咆哮】！！」

「なっ……！？　不意打ちだと！？」

別に卑怯じゃないですから。だってさっきから自分の攻撃のタイミングを今か今かと待っていたしナツの奴。流石にがじるを横取りしたのはまずかったかなー？と思ったからね。トドメはあげるよ。

――――――――――しかし、現実はそう甘くはなかった。

ドォォオオンン！！！

「な、なんだ！？」

俺たちが勝利を確信したその時、上から何かが降ってきた。な、何が落ちてきたんだ……？

「「「「マ、マスター！？」」」」
「ああ……ワシの……魔力が……」
そう。上から一階（ココ）に落ちてきたのは妖精（俺たち）の尻尾のマスターだったんだ。外傷は無いけど何故か皮膚が真緑に染まっている。これは……魔力を失ってる！？　上で一体何があったんだ！？
「チィ！！みんな、撤退だぁ――――――！！一旦ギルドへ戻るぞ！！」
「「「「撤退！？」」」」
魔力ゼロで床に倒れているマスターを見てついにエルザが撤退勧告を出した。その判断は正しいな。今のマスターを見てみんなの戦意が喪失している。このまま戦っても負けるのは目に見えてるし。
「漢（オトコ）は撤退などせんのじゃぁ――――――！！」
「オイ、エルザ！！俺たちはまだ戦え――――――」
「頼む……みんな……撤退してくれ……」
「「「「「っ！？」」」」」
あのエルザが弱音を吐いた。その事実が俺たちの心を揺さぶるのはそう難しくない。誰よりも強気で誰よりも強いエルザが涙を流して『撤退』と言った。それほどマスターの存在は大きいのだろうな。
「エルザの言うとおりだ！！殿（しんがり）は俺がやる！！みんなは速くギルドへ戻れ！！」
エルザの行動を見たばかりのみんなは反論をすることもなく全力でギルドへ向かって走っていった。その時にナツがハッピーとファン

トムの魔導士一人とどこおか違う方向へ走っていったが放っておいても大丈夫だろう。何があったのか知らないがナツなら無事に帰ってくる。そう信じることが俺にはできたんだ。

「「「「「逃がすかよ！！死ねぇ！！！」」」」」

さて……みんなも見えなくなってきたことだしこいつらを滅ぼすとしますか。

「はぁ……ったく。このモードはあまり多用するなってエルザに言われてんだけどなー……魔力の消費激しいし」

「何をごたごた言ってやがる！！」

「うぜぇ。お前らココでゲームオーバーって言ってんだ。見せてやるよ……海龍と火竜の全力の怒りってヤツをな！！【モード海炎龍】！！！」

モード海炎龍。

それは俺の海龍の魔力とナツの火竜の魔力を合わせたモード。

以前ナツと戦ったときにまだ水分の吸収ができなかった俺は魔力ゼロの状態になった時にナツの全魔力を吸収した。そしてそのときから魔力を大量消費する代わりにこのモードで戦うことができるようになったんだ。

「妖精の尻尾（フェアリーテイル）の魔導士嘗めんな！！！【海炎龍の咆哮】！！！」

「「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！？？」」」」

火竜の炎を纏った海龍の水がファントムの魔導士を一掃した。流石の破壊力だ。やっぱり魔力を大量に消費するだけは……ある……

……な……

バタッ

自分の魔力を大幅に放出してしまったので立つこともできなくなっちまった。
やっぱり一回の使用でもここまで追い詰められるか……

「かはっ……ま、まぁファントムは……一掃したし……結果よければすべてよしってこと……で……（ガクッ）」

俺の意識はそこで途絶えたんだ。

「っ！！」

みんなをギルドへと向かわせているとき、何故か頭の中に鋭い痛みが走った。
なんだ……この背中から走る悪寒は……

「まさか……リョウマか！？」

そういえば殿を務めているはずのリョウマがまだ帰ってきていない。
まさか……やられてしまったというのか！？

「グレイ！！私はリョウマを助けに行ってくる！！お前はみんなを頼む！！」
「リョウマ！？　わ、分かった！！任せろ！！」

「フィア！！」
「……了解。振り落とされるなよ」

フィアの【翼（エーラ）】で今来た道を戻っていく。リョウマが負けるなどあり得ないと思うが、もしあのモードを使用していたら……

「無事でいてくれ……リョウマ……」

私はフィアのＭＡＸスピードに耐えながらリョウマのもとへと急いだ。

――――――――――――――――――――

「……いた」
「！！　リョウマ！！！」

【翼】で飛ぶこと数分。ついにリョウマを私たちは発見した。外傷はあまり見られないがいつもの海龍の魔力が感じられない。おまけにリョウマの周囲には服が焦げていたりびしょ濡れになっちたりするファントムの魔導士どもが倒れている。やはりあのモードを使ったのか……

「しっかりしろリョウマ！！」

「うぅ……エ…ルザ……？」

良かった！まだ意識はある。早くポーリュシカさんのところへ運べばまだ間に合う！！

「大丈夫だ！すぐにポーリュシカさんのところへ運んで行ってやるからな！！」

「す……すまねぇ……使うな……って…言われてたのに……モード海炎龍を……」

「そのおかげでみんなは無事にギルドへ戻ることができたんだ！！それよりも早く魔力を……そうだ！！換装【海王の鎧】！！」

「……どうするんだ？」

「こうするんだ！！【海王斬】！！」

バシャァ！！

私の海王の鎧は攻撃時に水を発生させる。それを水の滅龍魔導士であるリョウマにぶつけるとどうなるか。それは……

キュゥゥゥ

……リョウマが失った魔力を回復することができるということだ。

「さんきゅーエルザ。おかげで全快とまではいかねえが魔力が戻った」

「例には及ばん。私はお前の相棒だから…ひゃっ！？」

突然、リョウマが私を抱きしめてきた。私よりも少し小さなリョウマの瞳が口元のすぐ近くにある。

「な、なんだいきなり！？／／／」

「護れてよかった……」

「え？」

「大事な仲間とお前を護れて……よかっ……（ガクッ）」

リョウマが突然気を失った。ど、どうしたというのだ！？　まだダメージが残ってるのか！？

「リョウマ！！リョウマ！！」

「……そんなに焦らなくてもいい。ただ疲れて眠っているだけだから」

「……は？」

「ぐぅー……」

顔が熱くて死んでしまいたかった。

幽鬼の支配者への復讐（後書き）

「仲間を売るぐらいなら死んだ方がマシだ！！」

By　エルザ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1118y/

FAIRY　TAIL～海龍の二つ名を持つ者～

2011年11月20日18時47分発行